

# 大正大学本の翻刻『源氏物語』（明石・滯標）

大場 孝 朗  
魚尾 久

## 翻刻の経緯

- 一 本翻刻は、大正大学附属図書館によって貴重書画像として公開（ホームページ）されている大正大学本源氏をパソコン教室でのリーディングの形式によって授業取り入れたものである。
- 一 翻刻は、平成二十年より日本語日本文学コースの授業「古典文学研究」における翻刻を基にして、それぞれ巻別の翻刻担当者によって精査したものである。
- 一 翻刻にあたっては、学習研究のためであるので、変体仮名の字母漢字も並列表記したところに特色がある。
- 一 当該授業は現在もおこなわれており、翻刻されたものは順次公開していく。

## 大正大学本源氏物語翻刻凡例

一 本翻刻は、大正大学附属図書館貴重書画像公開（ホームページ）から翻刻し、不明瞭なところは原本と照合する方法によった。

一 翻刻における頁の表記は、検索の便宜を図るため、ホームページにおける頁数を使用して、さらにその左右を明記した。

例【桐壺】27右

一 翻刻にあたっては、「変体仮名字母漢字（青色）」と「平仮名（黒色）」を並列表記した。

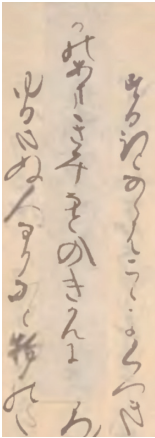
例 以徒蓮乃御時尔可女御更衣安末多左不良

いつれの御時にか女御更衣あまたさふら

一 附箋によって添付されている場合は、ホームページにしたがい、附箋のみの頁と本文の頁とにわけて翻刻をした。

例 附箋（可能安万幾美奈止乃幾可无尔）

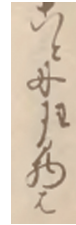
（かのおまきみなどのきかんに）



一行間の文字および補入文字は（ ）□にて本文に入れた。

例 古止丹尔（王）留物者

ことに（わ）る物は



民部少輔イ乃

民部少輔イの



一 見せ消ちは、そのまま表記して、「||」取り消し線を伏した。

例 「かゆ」

一 字母漢字は、旧字と略字が混用されているが、翻刻にあたっては通行体表記とした。

例 「禮」↓「礼」 「傳」↓「伝」

一 漢字は、旧字体と略字体とが混用されているが、通行体表記とした。

例 「國」↓「国」 「繪」↓「絵」

「哥」↓「歌」 「佛」↓「仏」

「聲」↓「声」

一 当て字は、そのまま表記した。

例 「さか月」(杯) 「伊与」(伊予)

一 当翻刻における巻別の担当責任者は、次の通りである。

「明石」 鈴木 治子 由井 恭子

「滯標」 森 晴彦 魚尾 孝久

(魚尾 孝久)

【明石】  
1

阿加之  
あかし

【明石】  
2

阿加之  
あかし

飛鳥井大納言雅俊卿  
飛鳥井大納言雅俊卿

大正大学の翻刻『源氏物語』（明石・濛標）

五

【明石】 3

【明石】 4

【明石】5

奈越安女風也万須神奈利志川末良天  
なをあめ風やます神なりしつまらて

日古呂丹奈利奴以登、物王比之幾事  
日ころになりぬいと、物わひしき事

加春志良須幾之加多行佐幾可那之幾御安利  
かすしらすきしかた行さきかなしき御あり

左満尔心徒与宇志毛盈於保之奈佐寿  
さまに心つようしもえおほしなさす

以可尔世末之加、里止天美也己仁可部良武  
いかにせましかゝりとしてみやこにかへらむ

己止毛末多世尔遊流左礼毛奈久天人王良  
こともまた世にゆるされもなくては人わら

八礼奈留事古楚満佐良猶古礼与利不可幾  
はれなる事こそまさらめ猶これよりふかき

山遠毛止女天也安止太衣奈末之止於保春尔毛  
山をもとめてやあとたえなましとおほすにも

奈見風尔佐八可礼天奈止人乃以比川多  
なみ風にさはかれてなと人のいひつた

【明石】6

遍武事後乃世末天毛可流く之幾名遠也  
へむ事後の世までもかるくしき名をや

奈可之八天无止於保之三太留御夢尔毛多、  
なかしはてんとおほしみたる御夢にもた、

於那之左満奈留物能三幾川、末川八之幾已遊止  
おなしさまなる物のみきつ、まつはしきこゆと

見給雲万袋奈久天安氣久類、日数尔  
見給雲まもなくてあける、日数に

曾部天京能可多以止、於本川可奈久加具奈可良身  
そへて京のかたいと、おほつかなくかくなから身

遠八布良可之徒留尔也止心本曾久於毛本止止  
をはふらかしつるにやと心ほそくおもほせと

可之羅佐之以川部久毛安良奴空乃美多礼仁  
かしらさしいつへくもあらぬ空のみたれに

以天多地満以留部幾人毛那之二條院与利楚  
いてたちまいるへき人もなし二條院よりそ

安奈可地耳安也之幾寸可多尔天楚本知万以連  
あなかちにあやしきすかたにてそほちまいれ

【明石】 7

流道可比尔天多尔人可奈尔曾登太尔御覽之  
る道かひにてたに人かなにそとたに御覽し

王久遍久毛阿良春末川遠比八良比徒部幾志  
わくへくもあらずまつをひはらひつへきし

川能於乃安八礼尔武川末之宇於保左流、毛我  
つのおのあはれにむつまじうおほさるゝも我

奈可良可太之氣奈久具之仁氣留心能程思志良  
なからかたしけなくくしにける心の程思しら

流御美尔八阿左末之久遠也見奈幾比能氣之  
る御みにはあさましくをやみなき比のけし

幾尔以止、空佐部止徒留心知之天奈可女也留  
きにいと、空さへとつる心ちしてなかめやる

可多奈久留武  
かたなくるむ

浦可世也以可丹不久良武思也留楚天  
浦かせやいかにふくらむ思やるそて

宇知奴良之波万奈幾比安八礼尔可那之幾  
うちぬらし波まなき比あはれにかなしき

【明石】 8

事遠加幾安川女給遍利飛幾安久流与利以  
事をかきあつめ給へりひきあくるよりい

止、美幾八満左利奴部久加幾久良須心知之給  
と、みきはまさりぬへくかきくらす心し給

京丹毛己能雨風以止安也之幾物乃佐止之  
京にもこの雨風いとあやしき物のさとし

奈利止天仁王惠奈止遠己奈八留部之止奈武  
なりとて仁王系などをこなはるへしとなむ

幾古衣侍之内尔万以利給加无多地女奈止毛春  
きこえ侍し内にまいり給かんたちめなともす

部天道止知天末川里己止毛太衣天奈武侍奈止  
へて道とちてまつりこともたえてなむ侍など

波可く志久毛阿良春加多奈志宇加多利奈世  
はかくしくもあらずかたくなしうかたりなせ

止京能可多乃事止於本世八以不可之久以可、奈止  
と京のかたの事とおほせはいふかしくいか、なと

御末部尔女之出天止八世給多、連以能雨乃  
御まへにめし出てとはせ給たゝれいの雨の



【明石】 9

遠也見那久婦利天風盤時く吹以天川止日  
をやみなくふりて風は時く吹いてつと日

己呂尔奈利侍遠連以奈良奴事尔於止呂幾侍也  
ころになり侍をれいならぬ事におとろき侍也

以登加久地能楚己止越留波可利能飛布利以可  
いとかく地のそこをるはかりのひふりいか

徒知能志川末良奴己止八侍羅佐利幾奈止以三  
つちのしつまらぬことは侍らさりきなとみ

志幾左満尔於止呂幾遠知天遠留可本能以登  
しきさまにおとろきをちてをるかほのいと

加良幾尔毛心本曾佐曾満左利氣留加久之徒、  
からきにも心ほそささまさりけるかくしつ、

世八徒幾奴部幾可也止於保左流、尔曾乃又能  
世はつきぬへきかやとおほさるゝにその又の

日能安可川幾与利風以見之宇婦幾塩太可宇  
日のあかつきより風いみしうふき塩たかう

美知天浪乃音安良幾事以者本毛山毛能古留  
みちて浪の音あらしき事いはほも山ものこる

【明石】 10

満之幾氣之幾也神乃奈利飛良女久左満佐良尔  
ましきけしき也神のなりひらめくさまさらりに

以者无可多那久天於知可、里奴止於保遊留耳  
いはんかたなくておちかゝりぬとおほゆるに

安流加幾利佐可之幾人奈之王礼良以可那留  
あるかきりさかしき人なしわれらひかなる

徒三遠於可之天加久可那之幾女越美留良武知、  
つみをおかしてかくかなしきめをみるらむち、

波、尔毛安比美春可奈之幾女子乃可本毛  
は、にもあひみすかなしきめ子のかほも

見天志奴部幾事止奈氣久君八御古、路遠  
見てしぬへき事となけく君は御こゝろを

志川女天奈仁波可利能安也未知尔天加己能佐幾  
しつめてなにはかりのあやまちにてかこのさき

尔命遠八幾八女无止徒与久於本之奈世止以止  
に命をはきはめむとつよくおほしなせといと

物佐八加之氣礼八以呂く乃見天久良佐、遣  
物さはかしければいろくのみてくらさ、け

【明石】 11

左世給天住吉乃神知可幾佐可比遠志川女  
させ給て住吉の神ちかきさかひをしつめ

満毛利給満己止尔跡遠多礼太末不神奈良八  
まもり給まことに跡をたれたまふ神ならば

太春氣給部止於本久能大願遠多天給遠能く  
たすけ給へとおほくの太願をたて給をのく

三川可良乃以能知遠八左流物尔天可、流御身能  
みつからのいのちをはさる物にてかゝる御身の

末多奈幾連以尔志川三給奴部幾古止能以三之  
またなきれいにしつみ給ぬへきことのみし

宇可那之幾仁心遠、古之天寸己之物於保由留  
うかなしきに心を、こしてすこし物おほゆる

加幾利八身仁可遍天己乃御身飛止川遠春久  
かきりは身にかへてこの御身ひとつをすく

比多天末川良武止、与美天毛呂己惠尔仏神遠  
ひたてまつらむと、よみてもろこゑに仏神を

念之太天末川留帝王乃不可幾尔也之奈  
念したてまつる帝王のふかき宮にやしな

【明石】 12

波連給天色く能多乃之飛尔於古利給之可  
なればて色くのたのしひにおこり給しか

登婦可幾御宇徒久之見於本也之満尔  
とふかき御うつくしみおほやしまに

安万弥久志川女類止毛加良遠己楚於保久  
あまねくしつめるともからをこそおほく

宇可遍給之可以万奈丹能武久比尔可古、羅  
うかへ給しかいまなにのむくひにかこゝら

与己左満奈留奈見風尔八於本、連給八无天无  
よこさまなるなみ風にはおほ、れ給はんでん

地古止八利給部川三奈久天川三仁安太利徒可  
地ことはり給へつみなくてつみにあたりつか

左久良為遠止良礼以遍越波奈連佐可比遠  
さくらぬをとられいへをはなれさかひを

左利天安氣久礼也春幾空奈久奈計幾給  
さりてあけくれやすき空なくなげき給

尔加久可奈之幾女越左部見以能知徒幾奈武止  
にかくかなしきめをさへ見いのちつきなむと

【明石】 13

春流八佐幾乃世乃武久比可此世乃遠可之加止  
するはさきの世のむくひか此世のをかしかと

神仏安幾良加尔末之満左八己能宇礼部也春女  
神仏あきらかにましまさはこのうれへやすめ

給部登美也之路能可多仁武幾天左満く能願  
給へとみやしろのかたにむきてさまくの願

遠太天給不又宇見能中能龍王与呂川乃  
をたて給ふ又うみの中の龍王よろつ

神多地尔願遠多天左世給尔以与く奈利止  
神たちに願をたてさせ給にいよくなりと

呂幾天於八之万須尔徒、幾多留羅宇尔於知  
ろきておはしますにつゝきたるらうにおち

閑、里奴本乃遠毛衣阿利天廊八屋計奴  
かゝりぬほのをもえあかりて廊はやけぬ

古、路太末之為奈久天安留加幾利満止不宇之  
こゝろたましひなくてあるかきりまとふうし

路乃可多奈流大炊殿止於本之幾屋尔宇川  
ろのかたなる大炊殿とおほしき屋にうつ

【明石】 14

之多天末川利天上下止奈久多地己美天  
したてまつりて上下となくたちこみて

以止羅宇可八志久奈幾止与武己恵以可川知尔毛  
いとらうかはしくなきとよむこゑいかつちにも

於止良須空八寸三遠春利多留屋宇尔天  
おとらす空はずみをすりたるやうにて

日毛暮耳氣利也宇く風奈報利雨能安之  
日も暮にけりやうく風なほり雨のあし

志女利星乃光見遊留仁古乃於満之所能  
しめり星の光見ゆるにこのおまし所

以止女川良加奈流毛以登加太之氣那久天志无  
いとめつらかなるもいとかたしけなくてしん

天无耳可部之宇徒之多天末川良武止春流尔  
てんにかへしうつしたてまつらむとするに

屋遣乃古利太留方毛宇登末之氣尔楚己  
やけのこりたる方もうとましけにそこ

良乃人乃婦見止、路可之満止部留仁美春奈止  
らの人のふみとゝろかしまとへるにみすなと

【明石】 15

美那不幾地良志天氣利夜越阿可之天已曾八  
みなふきちらしてけり夜をあかしてこそは

登太止利安部流尔君八御称无志遊之給天  
とたとりあへるに君は御ねんしゆし給て

於保之女久良春仁以止心安八多、之月佐之  
おほしめくらすにいと心あはた、し月さし

出天塩乃太可具美知計留跡毛安良波尔奈古利猶  
出て塩のたかくみちける跡もあらはになこり猶

与世返留浪安良幾遠柴能戸遠之安気天  
よせ返る浪あらきを柴の戸をしあけて

奈可女於八之万寸知可幾世可比尔物乃心越志利  
なかめおはしますすちかきせかひに物の心をしり

幾之加多行佐幾乃事宇地於本衣止也加久  
きしかた行さきの事うちおほえとやかく

屋止波可く之宇佐止留人毛奈之安也志幾阿万  
やとはかくしうさるとる人もなしあやしきあま

止毛奈止能太可幾人於八寸留所止天安川末利  
ともなどのたかき人おはする所とてあつまり

【明石】 16

万以利天幾、毛志利給奴事止毛越佐部徒利  
まいりてき、もしり給ぬ事ともをさへつり

安部流毛以止女川良可奈礼止遠比毛波良八須此  
あへるもいとめつらかなれとをひもはらはす此

風以万志八之也万佐良末之可八志本乃本利天  
風いましはしやまさらましかはしほのほりて

能古留所奈可良末之神乃多寸遺於路可奈良  
のこる所なからまし神のたすけおろかなら

佐利氣利登以不越幾、給不毛以止古、路  
さりけりといふをき、給ふもいとこゝろ

本楚之登以遍八於路可奈利  
ほそしといへはおろかなり

宇見尔満春神乃太春計尔可、羅春八塩  
うみにます神のたすけにかゝらすは塩

能也遠安比尔左須良部奈末之日称毛寸尔  
のやをあひにさすらへなましひねもすに

以利毛三徒留風能佐者幾仁佐己楚以遍  
いりもみつる風のさはきにきこそいへ

【明石】 17

以太宇古宇之給尔許礼八心尔毛安良須宇地  
いたうこうし給にければ心にもあらずうち

滿止路三給可太之計奈幾於八之所奈連盤  
まどろみ給かたしけなきおはし所なれば

多、与利并給部留仁故院能堂、於波之  
た、よりぬ給へるに故院のた、おはし

万志、左滿奈可羅多地給天奈止加久安也  
まし、さまなからたち給てなとかくあや

志幾所尔八毛乃寸留楚止天御手越止利天  
しき所にはものするそとて御手をととりて

飛幾多天給住与之能神乃美知比幾給  
ひきたて給住よしの神のみちひき給

末、仁波也不奈氏志天此宇良遠佐利称止  
ま、にはやふなてして此うらをさりねと

乃給八須以止宇礼之具天可之古幾御可氣尔  
の給はすいとうれしくてかしこき御かけに

王可礼多天末川利仁之己奈多左滿、可那之幾  
わかれたてまつりにしこなたさま、かなしき

【明石】 18

事乃於保久者部連八以万八己能奈幾佐耳  
事のおほくはへれはいまはこのなきさに

身越也寸天侍利奈末之登幾古衣給部者  
身をやすて侍りなましときこえ給へは

以登安留末之幾己止己礼盤多、以佐、可奈留  
いとあるましきことこれはた、いさ、かなる

物乃武久比也我盤久良井尔安利之登幾  
物のむくひ也我はくらぬにありしとき

安也末川己止奈可利之加止遠能川可良於可之安里  
あやまつことなかりしかとをのつからおかしあり

氣礼盤曾能川三遠、不留程以止滿奈久天己乃  
ければそのつみを、ふる程いとまなくてこの

世越可遍利見佐利川礼止以美之幾宇礼部  
世をかへり見ざりつれといみしきうれ

尔志川武遠美留尔太衣可多久天海尔以利奈  
にしつむをみるにたえかたくて海にいらな

幾佐尔能本利以多久古宇之仁多礼止可、流  
きさにのほりいたくこうしにたれとかゝる

【明石】19

川以天尔内裏丹楚宇寸部幾事阿留耳  
ついでに内裏にそうすへき事あるに

与利天奈无以楚幾能本利奴留止天立佐利  
よりてなむいそきのほりぬるとて立さり

給努安可須可奈之具天御止毛丹万以利奈武止  
給ぬあかすかなしくて御ともにまいらなむと

奈幾以利給天見阿氣給部連八人毛那久月  
なきいり給て見あげ給へれば人もなく月

乃可本能三幾良く止之天夢乃心知毛世春  
のかほのみきらくとして夢の心ちもせず

御氣者比止滿連流心知之天空乃雲安八礼  
御けはひとまれる心ちして空の雲あはれ

尔太奈比計利年比夢乃中仁毛見多天末川  
にたなひけり年比夢の中にも見たてまつ

良天恋之具於保川可奈幾御左滿越本能可奈連  
らて恋しくおほつかなき御さまをほのかなれ

登佐多加尔美多天末川利徒留能三於毛影耳  
ときたかにみたてまつりつるのみおも影に

【明石】20

於本衣給天王礼加久可那之飛越幾八女命  
おほえ給てわれかくなしひをきはめ命

徒幾奈武止之徒留遠多寸遣尔加氣利給部留  
つきなむとしつるをたすけにかけり給へる

止安者礼尔於保春仁与久楚加、流佐八幾毛  
とあはれにおほすによくそかゝるさきはきも

安利氣利登奈古利太乃毛之字、礼之字於  
ありけりとなこりたのもしうゝれしうお

本衣給事加幾利那之武祿徒止不多閑利天  
ほえ給事かきりなしむねつとふたかりて

中く奈留御心滿止比尔楚宇川、乃可那之幾  
中くなる御心まとひにそうつゝのかなしき

事裳宇地忘連夢丹毛御以良部遠以滿春己之  
事もうち忘れ夢にも御いらへをいますこし

幾古衣須奈利奴留事止以婦世左仁末多也  
きこえずなりぬる事といふせさにまたや

美衣給不止己止佐良仁祢以利給遍登佐良丹  
みえ給ふとことさらにねいり給へとさらに

【明石】 21

御女毛安八天阿可川支加多仁奈利尔氣利奈幾  
御めもあはてあかつきかたになりにけりなき

佐尔知以佐也可奈留舟越与世天人二三人は  
さにちいさやかなる舟をよせて人二三人は

閑利此多比能御屋止利遠佐之天久流尔誰人  
かり此たひの御やとりをさしてくるに誰人

奈良武止、部八阿可之乃浦与利佐幾能加見志本  
ならむと、へはあかしの浦よりさきのかみしほ

地乃御舩与楚比天万以礼留奈利氣无少納  
ちの御舩よそひてまられるなりけん少納

言左婦良飛給八、多以女无志天己止乃心止利  
言さふらひ給は、たいめんしてことのとことり

申左武止以不与之幾与於止呂幾天入道八可能  
申さむといふよしきよおとろきて入道はかの

国尔止久比尔天年己呂阿比可太良比侍之  
国にとくひにて年ころあひかたらひ侍し

加登王太久之尔以佐、可安比宇良武留事侍利天  
かとわたくしにいさ、かあひうらむる事侍りて

【明石】 22

己止奈流世宇楚久遠多仁加与八左天久之宇  
ことなるせうそくをたにかよはさて久しう

奈利侍奴留越奈見能万幾礼尔以可那留事  
なり侍ぬるをなみのまきれにいかなる事

可奈良武止於保女久君乃御夢奈止毛於保之  
かあらむとおほめく君の御夢などもおほし

阿者寸留事安利天八也安遍止乃給部八舟尔  
あはする事ありてはやあへとの給へは舟に

以幾天安比多利佐八加利者氣之可利徒留波風  
いきてあひたりさはかりはけしかりつる波風

尔以川乃万仁可不那天之給川良武止心衣可太宇  
にいつのまにかふなてし給つらむと心えかたう

思部利以奴留徒以多地乃日能夢尔左滿己止奈留  
思へりいぬるついたちの日の夢にさまことなる

物乃川遣志良春流事能侍之可八志无之可多  
物のつけしらする事の侍しかはしんしかた

幾事止思給之可登十三日仁安良太奈留  
き事と思給しかと十三日にあらたなる

【明石】 23

志流之三世无不祢与楚比満宇気天加奈良春  
しるしみせんふねよそひまうけてかならず

安女風也万八己能浦尔与世与止加祢天志女  
あめ風やまはこの浦によせよとかねてしめ

春事能侍之可八心見尔不祢与曾比万宇気天  
す事の侍しかは心みにふねよそひまうけて

万地侍之耳以可女之宇雨風以可徒知乃於止  
まち侍しいかめしう雨風いかつちのおと

路可之侍气礼盤尔乃御門丹毛夢遠志无之天  
ろかし侍ければ人の御門にも夢をしんして

久丹越太春久類末天毛己能以末之女能日遠春久  
くにをたすくるまでもこのいましめの目をすく

佐寸此与之遠川气申侍良武止天奈无不祢  
さす此よしをつけ申侍らむとてなむふね

以多之侍川留尔安也之幾風本楚宇不幾  
いたし侍つるにあやしき風ほそうふき

八部利天此浦尔川幾侍事満己止丹神乃  
はへりて此浦につき侍事まことに神の

【明石】 24

志流部多可八寸奈武古、丹毛、之志呂之女守  
しるへたかはすなむこ、にも、ししろしめす

事也侍川良武止天奈无以止毛波、可利於本久  
事や侍つらむとてなんいともは、かりおほく

侍礼止己能与之申給部止以不与之幾与志乃比  
侍れとこのよし申給へといふよしきよしのひ

也可丹川多部申春君八於保之万八寸尔夢宇  
やかにつたへ申す君はおほしまはずに夢う

徒、左満く、志川可奈良須佐止之乃屋宇奈留己止  
つ、さまくしつかならずさとしのやうなること

止毛遠幾之加多行春恵乃己良須於保之安八世  
ともをきしかた行す糸のこらすおほしあはせ

天世人乃幾、川多部无後乃曾志利毛也寸  
て世の人のき、つたへむ後のそしりもやす

可良佐留部幾遠波、可利天満己止能神能太春  
からさるへきををは、かりてまことの神のたす

遣丹毛安良武遠曾武久物奈良八末多己礼与利  
けにもあらむをそむく物ならばまたこれより



【明石】 25

満佐利天人王良者礼奈留女越也美武宇川、  
まさりて人わらはれなるめをやみむうつ、

能人乃心多尔奈越具流之波可奈幾事遠毛  
の人の心たになをくるしはかなき事をも

可川見川、我与利与八比万佐利毛之八久良井  
かつみつ、我よりよはひまさりもしはくらあ

太可久止幾世乃与世以満比登幾八満左留人尔八  
たかくとき世のよせいまひときはまさる人には

奈比幾志多可比天曾能心武氣越太止留部幾奈  
なひきしたかひてその心むけをたとるへきな

里氣利志利楚幾天登可那之止己曾武可之農  
りけりしりそきてとかなしとこそむかしの

佐可之幾人毛以比遠幾氣礼計丹加具命  
さかしき人もいひをきけれけにかく命

遠幾波女与仁又奈幾女乃加幾利遠見徒久  
をきはめよに又なきめのかきりを見つく

之川佐良尔乃知能安登乃奈越者不久止天  
しつさらのちのあとのなをふくとて

【明石】 26

毛太氣幾古止毛安良之夢乃宇知尔毛知、御  
もたけきこともあらし夢のうちにもち、御

可止能御遠之遍安利川連八末多何事遠可宇太  
かとの御をしへありつればまた何事をかうた

加者武止於本之天御返乃給志良奴世可以尔女川良  
かはむとおほして御返の給しらぬせかいにめつら

志幾宇礼部乃加幾利見徒連登都乃方与利  
しきうれへのかきり見つれと都の方より

止天古止、比遠己寸留人毛奈之多、行惠奈幾  
とてこと、ひをこする人もなした、行氣なき

空乃月日乃飛可利波可利遠布留郷能反止奈可女  
空の月日のひかりはかりをふる郷の友となかめ

侍利川類尔字礼之幾徒利舟越奈武可乃浦尔  
侍りつるにうれしきつり舟をなむかの浦に

志川也加尔閑久呂不部幾久満侍奈无也止能給  
しつやかにかくるふへきくま侍なんやとの給

加幾利那久与呂己比可之己万里申止毛安礼可宇  
かきりなくよろこひかしこまり申ともあれかう

【明石】 27

毛安連夜乃安氣波天奴佐幾仁御舟耳  
もあれ夜のあけはてぬさきに御舟に

多天末川連止天礼以乃志太之幾加幾利四五人  
たてまつれとてれいのしたしきかきり四五人

波可利之天多天末川利奴連以能可世以天幾天登不  
はかりしてたてまつりぬれいのかせてきてとふ

也宇丹安可之尔川幾給努多、者比王太留程尔天  
やうにあかしにつき給ぬた、はひわたる程にて

加多時乃万登以遍止奈越安也志幾末天三遊留  
かた時のまといへとなをあやしきまてみゆる

風乃心奈利者満乃佐万気丹以登心古止奈留人  
風の心なりはまのさけまにいと心ことなる人

志気宇美遊留能三奈武祢可比尔楚武幾太流  
しけうみゆるのみなむねかひにそむきたる

入道乃羅字志、女多留所く海乃川良仁毛山  
入道のらうし、めたる所く海のつらにも山

閑久礼丹毛時く、尔徒気天氣不遠佐可寸部幾  
かくれにも時くにつけてけふをさかすへき

【明石】 28

奈幾左乃登万屋遠已奈比遠之天後乃世  
なきさのとまやをこなひをして後の世

乃已止越思春満之徒部幾山水乃徒良耳以可  
のことを思すましつへき山水のつらにいか

女之幾太宇遠多天、三万以遠、己奈比己  
めしきたうをたて、三まいをこなひこ

能世乃満宇計尔秋乃多乃見遠加利於左免  
の世のまうけに秋のたのみをかりおさめ

乃古利濃与八比川武部幾以祢乃久良満知止  
のこりのよはひつむへきいねのくらまちと

毛奈止於利く、所尔川遣太留見所安利天之  
もなどおりく、所につけたる見所ありてし

阿川女多留太可塩尔於知天己乃比武春女  
あつめたるたか塩におちてこの比むすめ

奈登盤遠可部乃宿尔宇徒之天春満世気礼  
などはをかへの宿にうつしてすませけれ

盤此者満乃多地尔心也春久於八之万寸舟与利  
は此はまのたちに心やすくおはします舟より

【明石】 29

御車仁多末末川利宇徒留程日屋宇く佐之  
御車にたてまつりうつる程日やうくさし

乃本利天保乃可仁見多末末川留与利於以王守  
のほりてほのかに見たてまつるよりおいわす

礼与八比能不留心知之天惠三佐可部末末川住与之能  
れよはひのふる心ちしてゑみさかへてまつ住よしの

神遠可川く於可見太天万川留月日能飛可利  
神をかつくおかみたてまつる月日のひかり

遠天仁盈太末末川里多留心地之天以登奈美  
をてにえたてまつりたる心地していとなみ

徒可末末川留事以止古止八利也所能左滿遠八佐良  
つかうまつる事いとことほり也所のさまをはさら

尔毛以者寸徒久利奈之多留心波部己多知多天  
にもいはすつくりなしたる心はへこたちたて

以之世武左以奈止能安利左滿盈毛以者奴入江能  
いしせむさいなどのありさまえもいはぬ入江の

水奈止惠丹加、八心乃以多利春久奈可良武惠之八加幾  
水なとゑにかゝは心のいたりすくなくからむゑしはかき

【明石】 30

遠与婦末之登見遊月古路乃御春末井与利八  
をよふましと見ゆ月ころの御すまぬよりは

己与那久安幾良加尔奈川可之御志川良比奈止盈  
こよなくあきらかになつかし御しつらひなとえ

奈良須志天春万井遣流左滿奈登計尔宮己能  
ならずしてすまぬけるさまなとけに宮この

屋无古止奈幾所く仁己止奈良須盈无尔滿八遊幾  
やむことなき所くにごとならすえんにまはゆき

左滿八万佐利左滿尔楚三遊留寸己之御心之徒末利  
さまはまさりさまにぞみゆるすこし御心しつまり

天八以万盤以見志幾道尔以天立天可那之幾  
てはいまはいみしき道にいて立てかなしき

女越美留止奈幾之川美天安乃春滿尔止末利多留  
めをみるとなきしつみてあのすまにとまりたる

遠女之天身仁安万礼留物止毛於保久太末比天  
をめて身にあまれる物ともおほくたまひて

川可波春武川末之幾御以乃利乃之登毛佐留  
つかはずむつまじき御いのりのしともさる

【明石】 31

部幾所くゝ尔八此本止乃御安利左滿久八之久  
へき所くゝには此ほどの御ありさまくはしく

以比川可八寸部之入道能宮八可利仁八女川良可仁天  
いひつかはすへし入道の宮はかりにはめつらかにて

与見可遍礼留左滿奈止幾古衣給二条院能  
よみかへれるさまなときこえ給二条院の

安者礼奈利之程乃御返波加幾毛屋利給  
あはれなりし程の御返はかきもやり給

八寸宇知遠幾くゝ遠之能己比徒ゝ幾古衣給不  
はすうちをきくゝをしのかひつゝきこえ給ふ

御氣之幾奈越己止奈利返くゝ以見之幾免乃  
御けしきなをことなり返くゝいみしきめの

加幾利遠見徒久之八天津留安利左滿奈礼八  
かきりを見つくしはてつるありさまなれば

以万八登世越波奈留ゝ心乃三滿左利侍連登  
いまはと世をはなるゝ心のみまさり侍れと

鏡遠見帝毛止乃給之於毛影乃波奈類ゝ  
鏡を見てもとの給しおも影のはなるゝ

【明石】 32

与奈幾遠可久於保川可奈可良也止古ゝ羅可那之  
よなきをかくおほつかなからやとこゝらかなし

幾左滿くゝ乃字礼八之左八佐之遠可礼天  
きさまくゝのうれはしさはさしをかれて

波留可仁毛思也留可那志良佐利之浦与  
はるかにも思やるかなしらさりし浦よ

里遠地尔浦川多比志天夢能宇知奈留心  
りをちに浦つたひして夢のうちなる心

能三志天佐女波天奴程以可丹比可己止於本  
のみしてさめはてぬ程いかにひかことおほ

可良武登楚己者可登奈久加幾見多利給部  
からむとそこはかとなくかきみたり給へ

流志毛楚以止美末本之幾楚波女奈留遠以止  
るしもそいとみまほしきそはめなるをいと

己与奈幾御心佐之乃本止ゝ人くゝ見多天  
こよなき御心さしのほとゝ人くゝ見たて

末川留遠能くゝ布留佐止尔心本曾遣奈留古止  
まつるをのくゝふるさにと心ほそげなること

【明石】 33

徒天春部可女利遠也見奈可利之空乃氣之  
つてすへかめりをやみなかりし空のけし

幾奈古利那久春見王多利天安佐利春流  
きなこりなくすみわたりてあさりする

阿万止毛本己良之遣也春満八以止心本曾久  
あまともほこらしけすまはいと心ほそく

安満乃以者屋毛万礼奈利之遠人志介幾以止比  
あまのいはやもまれなりしを人しけきいとひ

盤志給之可止古、盤左満己止仁阿八礼奈留  
はし給しかとこ、はさまことにあはれなる

事於保具天与呂川尔於保之奈久左満留安  
事おほくてよろつにおほしなくさまるあ

可之能入道遠己奈比川止免多留左満以見之宇  
かしの入道をこなひつとめたるさまいみしう

思春満之多留越多、己能武春女悲止利遠毛天  
思すましたるをたゝこのむすめひとりをもて

王川良比多留計之幾以止可多波良以多幾末天  
わつらひたるけしきいとかたはらいたきまで

【明石】 34

時く毛羅之宇礼部幾己遊留御心知尔毛於可之止  
時くもらしうれへきこゆる御心ちにもおかしと

幾、遠幾給之入奈礼盤加久於保衣奈久天  
きゝをき給し人なればかくおほえなくて

女久利於八之太留毛佐留部幾契阿留尔也止  
めぐりおはしたるもさるへき契あるにやと

於毛本之奈可良猶加宇身越志川女多留本止盤  
おもほしなから猶かう身をしつめたるほどは

遠己奈比与利外乃事八於毛八之美也己能  
をこなひより外の事はおもはしみやこの

人毛多、奈留与利八以比之尔太可不止於毛  
人もたゝなるよりはひしにたかふとおも

本左武毛心八川可之宇於保左流連八氣之幾  
ほさむも心はつかしうおほさるればけしき

多地給古止奈之事尔不礼天古、路八世  
たち給ことなし事につれてこゝろはせ

安利左満奈部天奈良須毛阿利遺類可那止  
ありさまなへてならずもありけるかなと

【明石】 35

遊可志宇於保左礼奴仁之毛安良須古、尔八可之己  
ゆかしうおほされぬにしもあらずこ、にはかしこ

末里天身川可良毛遠左、万以良春毛能遍多、里  
まりてみつからもをさく、まいらすものへた、り

太留志毛能屋尔佐不良婦左留八明暮美多天末川良  
たるしものやにさふらふさるは明暮みたてまつら

万本之具安可寸思幾古衣天以可天於毛不古、路遠  
まほしくあかず思きこえていかておもふこ、ろを

可那部无止仏神遠以与、念之多天末川留年八  
かなへんと仏神をいよく念したてまつる年は

六十波可利尔奈利多礼止以止幾与遣仁安良末本之宇  
六十はかりになりたれといときよけにあらまほしう

遠已奈比佐良本比天人乃本止能安天波可奈礼者  
をこなひさらほひて人のほとのおてはかなれは

尔也安良武宇地比可见本礼、之幾事者安連止  
にやあらむうちひかみほれ、しき事はあれと

以丹之部乃物遠毛美志利天毛能幾多奈可良須与之  
いにしへの物をもみしりてものきたなからすよし

【明石】 36

川幾太留事毛滿之連、八武可之物語奈止世左勢  
つきたる事もまれ、はむかし物語などせさせ

天幾、給尔寸己之川連、乃末幾礼奈利年  
てき、給にすこしつれ、のまきれなり年

古路於保也氣王多久之御以止滿奈久天佐之  
ころおほやけわたくし御いとまなくてさし

毛幾、遠起給者奴世乃布留事止毛遠毛久  
もき、をき給はぬ世のふる事ともをもく

徒之以天徒、可太留加、流所遠毛人遠毛見佐良  
つしいてつ、かたるか、る所をも人をも見さら

末之可八佐宇、志久也止滿天遣宇安利止於保  
ましかはさう、しくやとまでけうありとおほ

春古止毛末之流加宇者奈礼幾已遊礼止毛以登  
すこともまじるかうはなれきこゆれともいと

氣多可宇心者川可之幾御阿利左滿尔佐己曾以比  
けたかう心はつかしき御ありさまにさこそいひ

志可川、末之宇奈利天王可思不事八心能末、尔  
しかつ、ましうなりてわか思ふ事は心のま、に

【明石】 37

毛衣宇知以天幾古衣奴遠心毛止那久久知於  
もえうちいてきこえぬを心もとなくくちお

志登波、君止以比安八世天奈久佐宇之見毛  
しとは、君といひあはせてなけくさうしみも

遠之奈部天能人太尔女也春幾八美衣奴世可以尔  
をしなへての人たにめやすきはみえぬせかいに

世尔八加、流人毛於八之氣利登見多天末川里之  
世にはかゝる人もおはしけりと見たてまつりし

耳川氣天身乃本止志良礼天以登波留加仁  
につけて身のほとしられていとほるかに

楚思幾古衣希留於也多地乃可久思安川可不  
そ思きこえけるおやたちのかく思あつかふ

遠幾久毛仁遣奈起事可奈止於毛不尔太、奈留  
をきくもにけなき事かなとおもふにたゝなる

与利八物安者礼奈利四月尔奈利奴衣可部乃  
よりは物あはれなり四月になりぬ衣かへの

御佐宇楚久御丁能可多比良奈止与之阿留左満  
御さうそく御丁のかたひらなとよしあるさま

【明石】 38

仁之以徒与呂川尔徒可宇末川利以止奈武遠以止  
にしいつよろつにつかうまつりいとむむをいと

於之宇寸、路奈利登於本世登人左満乃安久  
おしうすゝろなりとおほせと人さまのあく

末天思安可利太留左満能安天奈流尔於保之  
まで思あかりたるさまのあてなるにおほし

遊留之天見給京与利毛宇地志幾利太留御止不良  
ゆるして見給京よりもうちしきりたる御とふら

比止毛多遊三奈久於保可利乃止也可奈流夕月夜  
ひともたゆみなくおほかりのとやかなる夕月夜

尔海乃宇遍久毛利奈久美衣王多礼留裳寸三奈連  
に海のうへくもりなくみえわたれるもすみなれ

給之婦留佐止能池水仁思末可部良礼給尔以八武  
給しふるさとの池水に思まかへられ給にいほむ

可多奈具恋之幾事以川方止毛奈久行惠奈幾  
かたなく恋しき事いつ方ともなく行ゑなき

心知之給天太、女能末遍尔見屋良流、八阿八知  
心ちし給てたゝめのまへに見やらるゝはあはち

【明石】 39

嶋奈利氣利安八登波留可仁奈止能給天  
嶋なりけりあはとはるかになどの給て

安者登美留阿八地乃志滿農安者礼佐部能己  
あはとみるあはちのしまのあはれさへのこ

流久滿奈久春女留夜能月比佐之宇手毛不礼奴  
るくまなくすめる夜の月ひさしう手もふれぬ

幾无遠不久路与利止利以天給天波可奈宇可幾  
きんをふくろよりとりて給てはかなうかき

奈良之太万部流御左滿遠美多天末川留人毛也春  
ならしたまへる御さまをみたてまつる人もやす

可良須安八礼尔可那之宇思阿部利加宇連宇止以不  
からずあはれにかなしう思あへりかうれうといふ

手遠安流可幾利比幾春滿之給部流尔可能阿部  
手あるかきりひきすまし給へるにかの岡へ

乃家毛松農飛、幾浪乃音尔安比天心者世  
の家も松のひゝき浪の音にあひて心はせ

安流王可幾人盤身仁之三天安不部可免利何止毛  
あるわかき人は身にしみて思ふへかめり何とも

【明石】 40

聞王久滿之幾己乃毛加能毛乃志盤不留比人止毛  
聞わくましきこのもかものしはふるひ人とも

春、路八之久浜風遠飛幾阿利久入道毛盈  
すゝろはしく浜風をひきありく入道もえ

太部天久也宇本宇太遊三天以楚幾万以連利佐良尔  
たへてくやうほうたゆみていそきまいれりさらに

楚武幾仁之世乃中毛止利可部之思出奴遍久  
そむきにし世の中もとりかへし思出ぬへく

侍乃知能世尔称可比侍所乃安利左滿毛於毛比  
侍のちの世にねかひ侍所のありさまもおもひ

給部屋良流、世能左滿可奈登奈久く女天幾己  
給へやらるゝよのさまかなとなくくめてきこ

遊我御心丹毛於利く乃御安楚比甞能人可能人  
ゆ我御心にもおりくの御あそひその人かの人

乃琴笛毛之八己恵乃以天之左滿時く尔川気天  
の琴笛もしはこゑのいてしさま時くにつけて

与仁女天良礼給之阿利左滿美可止与利八之女人  
よにめてられ給しありさまみかたとよりはしめて



【明石】 41

太天末川利天毛天可之川幾安可女良礼多天  
たてまつりてもてかしつきあかめられたて

末川利給之遠人乃宇遍毛我御身能有左満毛  
まつり給しを人のうへも我御身の有さまも

於保之以天良礼天遊女能心知之太末不滿、仁可幾  
おほしいてられてゆめの心ちしたまふまゝ、にかき

奈良之給部流已惠毛心春古久幾已遊布留人盤  
ならし給へるこゑも心すこくきこゆふる人は

源毛止女安部春岡部尔比王佐宇能古止利仁屋利天  
涙もとめあへす岡へにひわさうのこととりによりて

入道比王能本宇之仁成天以登於可之宇女川良之幾  
入道ひわのほうしに成ていとおかしうめつらしき

手日止川不多川飛幾以天太里佐宇能御古止万以利  
手ひとつふたつひきいてたりさうの御ことまわり

多礼盤寸己之比幾給毛左満く、以見之宇乃見  
たれはすこしひき給もさまく、いみしうのみ

思幾古衣堂利以止佐之毛幾古衣奴毛能、祢太尔  
思きこえたりいとさしもきこえぬものゝねたに

【明石】 42

於利可良已曾盤万佐留物奈留越波留く、止物能  
おりからこそはまさる物なるをはるく、と物の

登、己本利奈幾海川良奈留尔中く、春秋乃  
と、こほりなき海つらなるに中く、春秋の

花紅葉能佐可利奈留与利八多、曾己波可登  
花紅葉のさかりなるよりはたゝそこほかと

奈宇志介礼流可計止毛奈満女之幾久井奈能  
なうしけれるかけともなまめしきくぬなの

宇知多、幾太留盤多可門佐之天止安八礼尔  
うちたゝきたるはたか門さしてとあはれに

於本遊祢毛以登仁奈宇以川留琴止毛越以止  
おほゆねもいとなういつる琴ともをいと

奈川可之宇比幾奈良之太留毛御心止万利天  
なつかしうひきならしたるも御心とまりて

己礼盤女能奈川可之幾左満尔天志止遺奈宇比幾  
これは女のなつかしきさまにてしとけなうひき

多留已曾於可之氣礼止於保可多仁乃給遠入道八  
たるこそおかしけれとおほかたにの給を入道は

【明石】 43

安以奈字地惠美天阿曾者寸与利奈川可之幾  
あいなううちゑみてあそはすよになつかしき

左満奈留八以川己能可侍良武奈仁可之加延喜能御天  
さまなるはいつこのか侍らむなにかしか延喜の御て

与利飛幾徒多部多留己止三代尔奈无奈利侍奴  
よりひきつたへたること三代になんなり侍ぬ

留越加宇徒多奈幾身尔天己能世乃事盤春天  
るをかうつたなき身にてこの世の事はすて

忘(侍) 奴流遠物乃世知尔以不世幾於利く盤  
忘(侍) ぬるを物のせちにいふせきおりくは

可幾奈良之侍之遠安也志宇万祢不物能侍曾  
かきならし侍しをあやしうまねふ物の侍て

志祢无尔可能前大王乃御手仁加与比天侍連  
しねむにかの前大王の御手にかよひて侍れ

山婦之能比可耳尔松風遠聞王多之者部流  
山ふしのひか耳に松風を聞わたしはへる

尔也安良武以可天古礼志乃比天幾己之女左世  
にやあらむいかてこれしのひてまこしめさせ

【明石】 44

天之可那止幾己遊留末、仁宇知王那、幾天  
てしかなときこゆるま、にうちわな、きて

涙於止須部可女利君古止越古止、毛幾、太末不  
涙おとすへかめり君ことをこと、もき、たまふ

末之可利遺流安堂利仁祢多幾王佐可那止天  
ましかりけるあたりにねたきわさかなとて

遠之屋利給不安也志宇武可之与利志也宇者女奈无  
をしやり給ふあやしうむかしよりしやうは女なん

比幾登留物奈利遺類佐可能御川多部尔天女五  
ひきとる物なりけるさかの御つたへにて女五

宮佐留世乃中能上寸仁毛能之給遺類遠曾  
宮さる世の中の上すにもし給けるをそ

乃御春地尔天登利多天、川多不留人奈之春部  
の御すちにてとりたて、つたふる人なしすへ

天太、今世尔名越登礼留人く、加幾奈天能  
てた、今世に名をとれる人く、かきなての

心屋利波可利仁乃見安留越古、尔加宇比幾  
心やりはかりにのみあるをこ、にかうひき

【明石】 45

己女給部梨遺流以止氣宇安利氣留事可奈  
こめ給へりけるいとけうありける事かな

以可天可八幾久部幾止能給幾己之女佐无尔八何  
いかてかはきくへきとの給きこしめさんには何

乃波、可利加侍良武於未部尔免之天毛安幾人能  
のは、かりか侍らむおまへにめしてもあき人の

中尔天太尔古楚布留事幾、波也須人侍氣連  
中にてたにこそふる事き、はやす人侍けれ

比王奈武満己止能祢越比幾志川武留人以尔之部毛  
ひわなむまことのねをひきしつむる人いにしへも

加太宇侍之遠左く止、己保留古止奈宇奈川可之幾  
かたう侍しをさくくと、こほることなうなつかしき

手奈止春知己止仁奈无以可天多止留仁可侍良  
手なとすちことになむいかてたどるにか侍ら

舞安良幾浪乃己惠仁末之流八可奈之宇毛思  
むあらし浪のこゑにまじるはかなしうも思

給遍良連奈可良加幾徒武留物奈計可之左  
給へられなからかきつむる物なけかしき

【明石】 46

万幾流、於利く毛侍奈登寸幾以多礼盤於可之  
まきる、おりくも侍なとすきいたればおかし

登於毛本之天佐宇能古止、里加部天太末者勢  
とおもほしてさうのこと、りかへてたまはせ

多利氣尔以登春久之天加以比幾太利以未能  
たりけにいとすくしてかいひきたりいまの

世尔幾古衣奴春知比幾川氣天手川可比  
世にきこえぬすちひきつけて手つかひ

以止以多宇閑良女幾遊乃祢不可宇春満之多利  
いといたうからめきゆのねふかうすましたり

伊勢能海奈良祢止幾与起奈幾佐尔可比也  
伊勢の海ならねときよきなきさにかひや

比呂八无奈止己惠与幾人尔宇太八世天王礼毛  
ひろはんなどこゑよき人にうたはせてわれも

時く比也宇之止利天己惠宇知曾部給遠琴比幾  
時くひやうしとりてこゑうちそへ給を琴ひき

佐之津、女天幾己遊御久多物奈止女川良之幾  
さしつゝめてきこゆ御くた物なとめつらしき

【明石】 47

左満尔天万以良世人くゝ尔酒志比曾之奈止之  
さまにてまいらせ人くゝに酒しひそしなどし

天遠能川可良物王守礼毛志奴部幾与能左満也  
てをのつから物わすれもしぬへきよのさま也

以太宇不氣遊久末、仁松風寸、志久天月毛  
いたうふけゆくまゝに浜風すゝしくて月も

入可多尔奈留末、仁寸見万佐利志川可奈留程  
入かたになるまゝにすみまさりしつかなる程

尔御物語乃古利奈宇幾古衣天己能浦尔春見  
に御物語のこりなうきこえてこの浦にすみ

波之女之本止能心川可比後乃世遠徒止武留左満  
はしめしほと心の心つかひ後の世をつとむるさま

可幾久川志天幾古衣天此武春女能安利左満  
かきくつしてきこえてこのむすめのありさま

止八寸可多尔尔幾己遊於可之幾毛能、左寸可  
とはすかたりにきこゆおかしきものゝさすか

尔阿者礼止幾、給之毛阿利以止、里申  
にあはれときゝ給しもありいとゞり申

【明石】 48

可多幾事奈礼止我君加字於保衣奈幾  
かたき事なれと我君かうおほえなき

世可以尔可利尔天毛宇川呂比於八之末之太留  
せかいにかりにてもうつろひおはしましたる

八毛之止之比乃老法之能以乃利申侍神仏  
はもしとし比の老法しのいのり申侍神仏

能安者礼比於八之末之天志八之乃程御心越毛  
のあはれひおはしましてしはしの程御心をも

奈也末之多天末川留尔也登奈武思給宇留  
なやましたてまつるにやとなむ思給うる

楚能遊部盤春見与之乃神遠太乃見八之女  
そのゆへはすみよしの神をたのみはしめ

多天万徒利天己乃十八年仁成侍奴女能  
たてまつりてこの十八年に成侍ぬめの

王良八乃以止幾奈宇侍之与利於毛不心者部利天  
わらはのいとぎなう侍しよりおもふ心はへりて

年己止能春秋己止耳加奈良須可能美也志路  
年ことの春秋ことにならずかのみやしる

【明石】 49

尔万以留事奈无侍比流与留能六時乃川止  
にまいる事なん侍ひるよるの六時のと

女尔身川可良乃波知春能上乃祢可比遠八  
めにみつからはちすの上のねかひをは

佐留物尔天堂、此人をたかきほいかなへ  
さる物にてた、此人をたかきほいかなへ

給部止奈武祢无之侍佐幾能世乃契徒多  
給へとなむねんし侍さきの世の契つた

奈久天己曾加久具知於之幾山可川登  
なくてこそかくちおしき山かつと

奈里侍遣女於也大臣能位遠太毛知給部利  
なり侍けめおや大臣の位をたもち給へり

幾三川可良加久為中乃太三登奈利天侍利  
きみつからかくぬ中のたみとなりて侍り

川幾く佐乃見於止利満可良无盤何能身尔加  
つきくさのみおとりまからんは何の身にか

奈里侍覽止可奈之久於毛比侍遠己礼盤武万  
なり侍覽とかなしくおもひ侍をこれほむま

【明石】 50

礼之時与利太乃武所奈武侍留以可尔志天  
れし時よりのむ所なむ侍るいかにして

都乃多可幾人尔太天末川良武止思己、  
都のたかき人にたてまつらむと思こ、

路不可幾仁与利本止く、尔川気天安未多能曾祢三  
ろふかきによりほとくにつけてあまたのそねみ

遠於比身能多女加良幾女越美留於利く、毛於、久侍  
をおひ身のためからきめをみるおりくもおく侍

礼止佐良尔久流之見止思給部春以能知能限  
れとさらにくるしみと思給へすいのちの限

盤世者幾衣尔毛波久、三侍奈无加字奈加良  
はせはき衣にもはく、み侍なむかうなから

見春天侍利奈盤奈三能中丹毛末之里字世  
みすて侍りなはなみの中にもましりうせ

祢止奈无遠幾天侍留奈止春部天末祢婦部  
ねとなんをきて侍るなすへてまねふへ

具毛安良奴事止毛越字知奈幾く幾己遊  
くもあらぬ事ともをうちなきくきこゆ

【明石】 51

君毛物遠左滿く於保之徒、久留於利可良盤  
君も物をさまくおほしつゝくるおりからは

宇知涙久三津く幾古之女寸与己左滿能川三  
うち涙くみつゝきこしめすよさまのつみ

尔安太利天思日可気奴世可以尔太く与不裳  
にあたりて思ひかけぬせかいにたゝよふも

奈仁乃川三尔天可止覺川可那久思徒留遠己  
なにもつみにてかど覺つかなく思つるをこ

与比乃御物可多利仁幾、安八寸礼盤遣尔阿左  
よひの御物かたりにきゝあはずればけにあさ

可良奴佐幾能世乃契尔己曾八止阿八連尔奈无  
からぬさきの世の契にこそはとあはれになん

奈止可八加久佐多可尔思志利給遣留事越以未  
などかはかくさたかに思しり給ける事をいま

万天八川氣給八佐利徒良武宮己波奈礼志  
まてはつけ給はさりつらむ宮こはなれし

時与利世乃川祢奈幾毛安知幾奈久遠己奈比  
時より世のつねなきもあちきなくをこなひ

【明石】 52

与利外乃事那久天月日越不留尔心毛美那  
より外の事なくて月日をふるに心もみな

久川遠礼尔氣利加、流人毛乃之給止八本乃  
くつをれにけりかゝる人ものし給とはほの

幾、奈可良以多徒良人遠八遊、志幾物尔己曾  
きゝなからいたつら人をはゆゝしき物にこそ

思春天給良女止於毛比久川之徒留越佐良八  
思すて給らめとおもひくつしつるをさらは

美知比幾給不部幾仁己曾安奈礼心細幾独  
みちひき給ふへきにこそあなれ心細き独

祢乃奈久佐尔毛奈止能給遠加幾利那久  
ねのなくさめにもなどの給をかきりなく

宇礼之登思遍利  
うれしと思へり

比止利祢盤君毛志利奴也徒連く止思日  
ひとりねは君もしりぬやつれくと思ひ

安可之能宇良佐比之左越末之伝止之月於毛比  
あかしのうらさひさをましてとし月おもひ

【明石】 53

給部王多留以不世佐越遠之波可良世給部止幾己  
給へわたるいふせきををしはからせ給へときこ

由留氣者比宇知王奈、幾多礼止佐春可耳  
ゆるけはひうちわなゝきたれとさすかに

遊部奈可良春佐連登宇良奈礼多良武人者止天  
ゆへなからすされとつらなれたらむ人はとて

旅己呂毛宇良可那之佐尔安可之可称久左  
旅ころもうらかなしさにあかしかねくさ

乃枕盤夢毛武者須止宇知美多礼給部  
の枕は夢もむすはすとうちみたれ給へ

流御左満盤以止楚安以行徒幾以不与之  
る御さまはいとそあい行つきいふよし

奈幾御遣者比奈留加寸志良奴事止毛幾  
なき御けはひなるかすしらぬ事ともき

己衣徒久之多礼止宇留佐之也比可己止止毛  
こえつくしたれとうるさしやひかことも

仁可幾奈之多連者以止、遠己仁可多久那  
にかきなしたれはいとゝをこにかたくな

【明石】 54

志幾入道能心者部毛安良八礼奴部可女利思  
しき入道の心はへもあらはれぬへかめり思

事可川く加奈比奴流心知之天寸、志宇於  
事かつくかなひぬる心ちしてす、しうお

毛比為太留尔又乃日能比留川可多岡部耳  
もひぬたるに又の日のひるつかた岡へに

御文徒可八寸心者川可之幾左満奈女留蒙  
御文つかはす心はつかしきさまなめるも

中く可、流物乃久満尔楚思乃本可奈留  
中くかゝる物のくまにそ思のほかなる

事毛古毛留部可女留登心川可比之給比天  
事もこもるへかめると心つかひし給ひて

己満乃久流三色能紙仁盈奈良春比毛幾  
こまのくるみ色の紙にえならはすひき

徒久呂比天  
つくるひて

遠知己地毛志良奴雲井尔奈可女王比  
をちこちもしらぬ雲あになかめわひ

【明石】 55

可寸女之宿能已寸惠遠曾止婦思尔八登者  
かすめし宿のこす糸をそとふ思にはとは

加利也安利氣无入道毛人志礼春侍幾己  
かりやありけん入道も人しれす侍きこ

由止天可乃以遍尔幾井多利氣留毛志留氣礼  
ゆとてかのいへにきぬたりけるもしるけれ

者御徒可比以登滿八由幾末天患者寸御返  
は御つかひいとまはゆきまで糸はず御返

以止比左志宇字知仁入天楚、能可世止武春  
いとひさしうちに入てそゝのかせとむす

免盤佐良尔幾可寸以登者川可之氣奈留御文能  
めはさらにきかすいとつかしけなる御文の

左滿尔左之以天武手徒幾波川可之字徒、  
さまにさしいてむ手つきはつかしうつ、

万志宇人乃御程我身能本止思尔己与奈宇  
まして人の御程我身のほと思にこよなう

天心知安之止天与利婦之奴以比王比天入道  
て心ちあしとてよりふしぬいひわひて入道

【明石】 56

楚加久以止毛可之己幾八為中飛天侍太毛止  
そかくいとまかしこきはぬ中ひて侍たもと

仁徒、三安末利奴留尔也佐良尔三輪裳  
につゝみあまりぬるにやさらにみ給も

遠与比侍奴可之己佐尔奈无左類盤  
をよひ侍ぬかしこさになむさるは

奈可武良无於奈之雲井遠奈可武留八思毛  
なかむらんおなし雲ぬをなかむるは思も

於那之思日奈留良武止奈无美給留以止春幾  
おなし思ひなるらむとなんみ給るいとすき

寸幾之也止幾古衣多利美知乃久仁紙  
すきしやときこえたりみちのくに紙

仁以太宇布留女幾多礼止加幾左滿与之者三  
にいたうふるめきたれとかきさまよしはみ

堂利氣尔毛春幾堂留加奈止女左滿之宇  
たりけにもすきたるかなとめさましう

美給御川可比尔奈部天奈良奴多滿毛奈登  
み給御つかひになへてならぬたまもなと



【明石】 57

加幾川氣多利末多能日世无之可幾八美之良  
かきつけたりまたの日せんしかきはみしら

須奈武登天  
すなむとて

以不世久毛心尔物遠奈也武可奈也与屋  
いふせくも心に物をなやむかなやよや

以可尔止止婦人毛奈三以比可多美止己能多比者  
いかにととふ人もなみいひかたみとこのたひは

以登以多宇奈与比多留宇寸也宇仁以止宇川久之  
いといたうなよひたるうすやうにいとうつくし

氣尔加幾給部利王可幾人乃女天佐良武  
けにかき給へりわかき人のめてさらむ

毛以止安未利武毛礼以多可良无女天太之止八  
もいとあまりむもれいたからむめてたしとは

三礼止奈寸良比奈良奴身能程乃以三之字加比  
みれとなすらひならぬ身の程のいみしうかひ

奈氣連盤中く世尔安留物止多川祢之里  
なければ中く世にある物とたつねしり

【明石】 58

給尔川氣天奈美多久満礼天佐良尔連以能  
給につけてなみたくまれてさらにいの

止宇奈幾遠世女天以者連天安左可良奴寿  
とうなきをせめていはれてあさからぬす

志女多留紫乃紙仁墨徒起己久宇寸久  
しめたる紫の紙に墨つきこくすく

万幾良八之天  
まきはして

思覧心能本止也屋与以可尔末多美奴人  
思覧心のほどややよいかにまたみぬ人

乃幾く可奈也末武天能左満可幾多留佐万  
のきくかなやまむてのさまかきたるさま

奈登屋无己止那幾人尔以多宇於登留満志宇  
なとやんことなき人にいたうおとるましう

上春女幾太利京能事於保衣天於可之止見  
上すめきたり京の事おほえておかしと見

給部止宇知志幾利天川可者佐无毛人女徒く末之  
給へとうちしきりてつかはさんも人めつゝまし

【明石】 59

氣礼者二三日部多天津、徒連く奈留夕暮毛之八  
ければ二三日へたてつ、つれくなる夕暮もしは

物安八連奈留明本乃奈登屋宇仁満幾良八之天  
物あはれなる明ほのなどやうにまきはして

於利く人毛於那之心尔美之里奴部幾程遠之  
おりく人もおなし心にみしりぬへき程をし

八可利天可幾加者之給尔遣那可良春心不可久思阿  
はかりてかきかはし給にけなからす心ふかく思あ

可利多留氣之幾毛美天八也末之止於保春物可良  
かりたるけしきもみではやましとおほす物から

与之幾与加里也宇之天以比之氣之幾毛女左満  
よしきよかりやうしていひしけしきもめさま

志宇止之比心川氣天安良无遠女能末部尔思太可部无  
しうとし比心つけてあらんをめのまへに思たかへん

裳以止於之宇於保之女久良左礼天人春、見  
もいとおしうおほしめくらされて人すゝみ

万以良八佐留可多尔天毛満幾良八之天无登於保世  
まいらはさるかたにてもまきはしてんとおほせ

【明石】 60

登女八多中く屋武己止奈幾、八能人与利毛以  
と女はた中くやむことなき、はの人よりもい

太宇思安可利天称多氣尔毛天奈之幾古衣  
たう思あかりてねたけにもてなしきこえ

多礼盤心久良部尔天楚春幾氣類京乃事遠  
たれは心くらへにてそすきける京の事を

加久世幾遍多、里天八以与く於保川可奈久  
かくせきへたゝりてはいよくおほつかなく

於毛比幾己衣給天以可左満尔春満之多八不連  
おもひきこえ給ていかさまにすましたはふれ

仁久、毛安流可奈忍天也武可部多天万川利天満  
にく、もあるかな忍てやむかへたてまつりてま

之登於保之与八流於利く安礼止佐利止毛  
しとおほしよはるおりくあれとさりとち

閑久天也者年遠加左称无以末佐良尔人王呂幾  
かくてやは年をかさねいまさらに人わらき

事遠屋八登於保之志徒女多利曾能止之  
事をやはとおほししつめたりそのとし

【明石】 61

於保遣仁物能佐止之志幾利天物左八可之幾己止  
おほけに物のさとしきりて物さはかききこと

於本可利三月十三日仁神奈利比良女幾雨風  
おほかり三月十三日に神なりひらめき雨風

佐八可之幾夜御門乃御夢仁院乃御門  
さはかきき夜御門の御夢に院の御門

御末部乃美八之能毛止仁多、世給天御氣之幾  
御まへのみはしのもとにたゝせ給て御けしき

以止安之宇天仁良三幾己衣左世給越可之己未利天  
いとあしうてにらみきこえさせ給をかしまりて

於波之末須幾古盈左世給事共於本可利源氏能  
おはしますきこえさせ給事共おほかり源氏の

御事止毛奈利氣武可之以登於曹呂之宇  
御事ともなりけむかしいとおそろしう

以止於之登於保之天幾左起爾幾古衣左世給  
いとおしとおほしてきさききこえさせ給

氣礼者雨奈止布利空美多礼多留夜者思奈之  
ければ雨なとふり空みたれたる夜は思なし

【明石】 62

奈留己止者佐曾侍留加呂く志幾屋宇仁於保之  
なることはさそ侍るかろくしきやうにおほし

於止呂久末之幾古止、き己衣給仁良三給之仁  
おとろくましきこと、きこえ給にらみ給しに

女見安八世給止美之氣尔也御目王川良比給天  
め見あはせ給とみしけにや御目わつらひ給て

太部可多久奈也三太末婦御津、之三内尔毛宮仁毛  
たへかたくなやみたまふ御つゝしみ内にも宮にも

可幾利那久世左世給於保幾於止、宇世給努  
かきりなくせさせ給おほきおとゝうせ給ぬ

古登八利能御与者比奈礼止徒幾く、尔遠能川可良  
ことわりの御よはひなれとつきくにおのつから

左八可之幾事阿留尔大宮毛楚己波可登  
さはかきき事あるに大宮もそこはかと

奈久王川良比給天程布連八与八利給也宇奈留  
なくわつらひ給て程ふればよりはり給やうなる

内仁於本之奈氣久事左満く、也奈越己能源氏  
内におほしなげく事さまく、也なをこの源氏

【明石】 63

乃君滿己止仁遠可寸己止奈幾仁天加久志川武の君まことにをかすことなきにてかくしつむ

奈良者加奈良須此武久比安利奈武止奈武於本衣ならはかならず此むくひありなむとなむおほえ

給今八猶毛登乃位遠毛給天无止多比く  
給今は猶もとの位をも給てんとたひく

於本之能給遠世能毛止幾安八く之幾屋宇奈留部おほしの給を世のときあはくしきやうなるへ

志徒三仁於知天都遠佐利之人遠三止世太仁しつみにおちて都をさりし人を三とせたに

春久佐春由留左連武己止八与能人毛以可く、以比すくさすゆるされむことはよの人もいかく、いひ

徒多部侍良武奈止幾左起可太宇以左女太末婦尔つたへ侍らむなときさきかたういさめたまふに

於毛本之者く、可流本止尔月日可左奈里天御奈也おもほしはく、かるほとに月日かさなりて御なや

見止毛左満く、尔遠毛利満佐良世給明石耳八みともさまく、にをりまさらせ給明石には

【明石】 64

連以乃秋者浜風乃己止奈流尔比止利祿毛万女の秋は浜風のことなるにひとりねもまめ

也可尔物王比之久天入道尔毛於利く、可多良八世やかに物わひしくて入道にもおりく、かたらはせ

給止加久満幾良八之天己地万以良世与止能給天給とかくまきはしてこちまいらせよとの給て

王多利給八无事遠八安留末之宇於本之多留越佐宇わたり給はん事をはあるましようおほしたるをさう

志三八太佐良尔思多川部久毛安良春以止久知於之しみはたさらに思たつへくもあらずいとくちおし

幾起八乃為中人己曾加利仁久多利多留人乃ききはのみ中人こそかりにくたりたる人の

宇知止氣事仁川幾天左也宇仁加呂良可仁可多良婦うちとけ事につきてさやうにかろろかにかたらふ

王左越毛春奈礼人可寸仁毛於保左礼左良武物由部わさをますなれ人かすにもおももされさらむ物ゆへ

我盤以三之幾物思遠也曾部无加久遠与比奈我はいみしき物思をやそへんかくをよひな

【明石】 65

幾心越思部流於也多地毛与己裳里天春久須止之  
き心を思へるおやたちもよこもりてすくすとし

月己曾安比奈多能見仁行末心仁久、思良女中く  
月こそあひなたのみに行末心にく、思らめ中く

奈留心遠也徒久左武止思日天多、此浦尔於者  
なる心をやつくさむと思ひてた、此浦におは

世无本止可、流御不三八可利遠幾古衣可八左无己曾於  
せんほとかゝる御ふみはかりをきこえかはさんこそお

呂可奈良祢年比遠登仁乃三幾、天以川可盤  
ろかならね年比をとにのみきゝていつかは

佐留人乃御安利左満遠本能可仁毛美多天末川良武  
さる人の御ありさまをほのかにもみたてまつらむ

奈登思可気佐利之御春万比尔天万本奈良祢止  
など思かけさりし御すまひにてまほならねと

本能可尔毛美多天末川利世尔奈幾物止聞徒多部  
ほのかにもみたてまつり世になき物と聞つたへ

志御己止乃祢遠毛可世尔川気天幾、明暮乃  
し御ことのねをもかせにつけてき、明暮の

【明石】 66

御安利左満於保川可奈可良天加久末天与仁安留物止  
御ありさまおほつかながらてかくまてよにある物と

於本之尋奴留奈登己曾可、流安万能奈可仁久知奴留  
おほし尋ぬるなどこそかゝるあまのなかにくちぬる

身仁安末流己止奈礼奈止思不尔以与く者川可之宇天  
身にあまることなれなど思ふにいよくはつかしうて

川遊毛遣知可幾事盤思与良寸於也多知八古、  
つゆもけちかき事は思よらすおやたちはこゝ

羅能年比乃以能利乃加奈不部幾越思奈可良遊久  
らの年比のいのりのかなふへきを思なからゆく

里可仁美世多天末川利天於保之可寸末部佐良武  
りかにみせてまつりておほしかすまへさらむ

時以可那留奈気幾遠可世武止思屋留尔遊、之久  
時いかなるなげきをかせむと思やるにゆ、しく

天女天多幾人止幾己遊止毛徒良宇以三之宇毛  
ためでたき人ときこゆともつらういみしうも

安留部幾遠女尔美衣奴仏神遠太乃三多天方  
あるへきをめにみえぬ仏神をたのみたてま

【明石】 67

徒利天人乃御心遠毛春久世遠毛志良天奈登  
つりて人の御心をもすくせをもしらてなと

宇知加部之思美多礼多利君八此己呂能浪能声  
うちかえし思みたれたり君は此ころの浪の声

尔加乃毛能、祢遠幾可八也佐良春波可比那久  
にかのもの、ねをきかはやさらずはかひなく

己曾奈止川祢者能多末不志乃比天与呂之幾  
こそなとつねはのたまふしのひてよろしき

日美止天八、君乃止可久思王川良婦遠幾、以連  
日みとては、君のとかく思わつらふをき、いれ

春天之止毛奈止仁多尔志良世春心比止川尔立  
すてしともなとにたにしらせず心ひとつに立

井可、也久八可利志川良比天十三日能月乃者那  
ぬか、やくはかりしつらひて十三日の月のはな

也加尔佐之出多留仁多、安多良夜乃止幾己衣  
やかにさし出たるにた、あたら夜のとときこえ

堂利君盤春幾能佐万也登於保世止御  
たり君はすきのさまやおほせと御

【明石】 68

奈越之太天末川利比幾徒久呂比天夜不可之  
なをしたてまつりひきつくるひて夜ふかし

天出給御車八尔那久徒久利堂礼止所世  
て出給御車はになくつくりたれと所せ

志止天御馬尔天以天太末不己礼美川奈止  
しとて御馬にていてたまふこれみつなと

八可利遠左不良八世給屋、止越久以留所奈利  
はかりをさふらはせ給や、とをくいる所なり

气利道乃本止毛与毛能浦く、美主多之給天  
けり道のほともよもの浦く、みわたし給て

思止知美万本之幾入江乃月影尔毛末川恋  
思とちみまほしき入江の月影にもまつ恋

志幾人乃御事遠思以天幾古衣給尔也可天  
しき人の御事を思いてきこえ給にやかて

武末比幾過天於毛武幾奴部久於保春  
むまひき過ておもむきぬへくおほす

秋乃夜能月毛乃駒与我已不留雲為  
秋の夜の月もの駒よ我こふる雲の

【明石】 69

尔加氣礼時乃万毛三武字知比止利己多礼多  
にかけれ時のまもみむうちひとりこたれた

満不徒久連流左満木不可久以多幾所万佐利  
まふつくれるさま木ふかくいたき所まさり

天見所安留春万井奈利海徒良八以可女志宇  
て見所あるすまぬなり海つらはいかめしう

於毛之呂久己礼盤心本曾宇寸三太留左満古、仁  
おもしろくこれは心ほそうすみたるさまこゝに

井天思乃己寸事八安良之登春良武於本之也  
ぬて思のこす事はあらしとすらむおほしや

良流、仁物安八礼也三昧堂知可久天鐘乃己恵  
らるゝに物あはれ也三昧堂ちかくて鐘のこゑ

松乃風尔比、幾安比天物可那之宇岩尔於比  
松の風にひゝきあひて物かなしう岩におひ

太留松乃根佐之毛心者安留左満奈利前栽  
たる松の根さしも心はえあるさまなり前栽

止毛仁虫乃声遠徒久之堂利古、可之己乃  
ともに虫の声をつくしたりこゝかしこの

【明石】 70

安利左満奈止御覽春武寸女春満世太留可多八  
ありさまなと御覽すむすめませたるかたは

心古止仁美可幾天月以礼多留真木能戸口氣之  
心ことにみかきて月いれたる真木の戸口けし

幾八可利遠之安氣堂利宇屋春良比奈仁  
きはかりをしあけたりうちやすらひなに

可止乃給尔裳加宇末天八美衣多天末川良之登  
かとの給にもかうまてはみえたてまつらしと

不可宇思不尔物奈計可志宇天宇知止氣怒心  
ふかう思ふに物なけかしうてうちとけぬ心

左満遠己与奈宇毛人女以多留可那佐之毛安流  
さまをこよなうも人めいたるかなさしもある

満之幾幾八能人太尔加八可利以比与利奴礼者  
ましききはの人たにかはかりいひよりぬれは

心徒与宇志毛安良春奈良比多利之遠以止加宇  
心つようしもあらずならひたりしをいとかう

也川礼多留仁安那川良八之幾尔也止称多宇  
やつれたるにあなつらはしきにやとねたう

【明石】 71

左満くゝ尔於保之奈也女利奈左計奈宇遠之  
さまくにおほしなやめりなさけなうをし

堂ゝ无毛古止能左満尔多可部利心久良部耳  
たゝんもことのさまにたかへり心くらへに

万氣无己曾人王呂氣礼奈止美多礼宇良見  
まけんこそ人わろけれなとみたれうらみ

給左満遣仁物思日志良武人尔己曾美世満  
給さまけに物思ひしらむ人にこそみせま

本之氣礼知可幾幾丁乃比毛仁佐宇能古止乃  
ほしけれちかきき丁のひもにさうのこのの

比幾奈良佐連太留毛氣八比之止氣那久宇知  
ひきならされたるもけはひしとけなくうち

止計奈可良加幾万佐久利氣留程美衣天於可之  
とけなからかきまさくりける程みえておかし

氣礼者此幾ゝ奈良之太留古止遠佐部也奈止  
けれは此きゝならしたることをさへやなと

与呂川尔乃太末不  
よろつにのたまふ

【明石】 72

武徒古止越可多利安者世武人毛可那宇幾  
むつことをかたりあはせむ人もかなうき

世乃夢毛奈可者左武也登  
佐の夢もなかはさむやと

安氣奴与仁也可天万登遍留古ゝ呂尔盤  
あけぬよにやかてまとへるころには

以川連遠由女止王幾天可多良武本能可奈類  
いつれをゆめとわきてかたらむほのかなる

氣八比伊勢乃美也寿所以止与宇於保衣多利  
けはひ伊勢のみやす所いとようおほえたり

奈尔心毛奈宇宇知止氣天為多利計留遠加宇  
なに心もなううちとけてみたりけるをかう

毛能於本衣奴尔以止王利奈久天計地可里計留  
ものおほえぬにいとわりなくてけちかりける

佐宇之能宇知尔入天以可天可多女氣留仁可以  
さうしのうちに入ていかてかためけるにかい

止徒与幾遠志為天毛遠志立給八奴左満  
とつよきをしぬてもをし立給はぬさま



【明石】 73

奈利佐連登佐能見毛以可天可奈良武人様以止  
なりされとさのみもいかてかあらむ人様いと

安天尔曾比衣天心八川可之幾計八比曾志多流  
あてにそひえて心はつかしきけはひそしたる

加宇安那可奈利計留契遠於本春仁毛安左  
かうあなちなりける契をおほすにもあさ

可良須阿八礼也御心佐之乃知可万佐利寸留奈流  
からすあはれ也御心さしのちかまさりするなる

部之川称盤以止八之幾夜乃奈可佐毛止久明  
へしつねはいとはしき夜のなかさもとく明

奴留心知春礼者人尔志良連之登於保春毛  
ぬる心ちすれば人にしられしとおほすも

己、吕安者多、志宇天己満可仁可多良比遠幾  
ころあはた、しうてこまかにかたらひをき

天出給努御文以止忍比天曾氣不者安以奈  
て出給ぬ御文いと忍ひてそけふはあいな

幾御心乃遠尔奈利也古、仁毛可、流事以可天  
き御心のをになりやこ、にもかゝる事いかて

【明石】 74

毛良佐之登徒、美天御使古止、久之久裳  
もらさしとつ、みて御使ことくしくも

毛天奈左奴遠武祢以多久思部利加宇天後盤  
もてなさぬをむねいたく思へりかうて後は

志乃比徒、時、於八寸本止毛寸己之波奈礼  
しのひつ、時、おほすほともすこしはなれ

多留仁遠能川可良物以比佐可那幾安左能子毛也  
たるにをのつから物いひさかなきあさの子もや

多知末之良无登於本之者、可流本止遠佐連  
たちましらんとおほしは、かるほとをされ

者与登思那氣幾多留遠尔以可那良武  
はよと思なけきたるをけにいかならむ

登人道毛極楽乃祢可比遠八忘連多、此  
と入道も極楽のねかひをは忘れた、此

御氣之幾遠末川古止尔八寸以満佐良尔心遠  
御けしきをまつことにはすいまさら心に

見多留毛以止、遠之氣也二條乃君能風  
みたるもいとくをしけ也二條の君の風

【明石】75

津天尔天毛里幾、給八无事盤多八不連  
つてにてももりき、給はん事はたはふれ

丹天毛心乃遍多天安利氣流止思宇登万  
にても心のへたてありけると思ふとま

礼多天末川良武八心久流之宇者川可之宇於  
れたてまつらむは心くるしうはつかしうお

本左流、裳安那可地奈流御心佐之能本止奈  
ほさる、もあなかちなる御心さしのほとな

流可之可、流方能事遠八佐春可仁心止、女  
るかしかゝる方の事をはさすかに心と、め

天宇良見給部利之於利く、奈止天安也奈幾  
てうらみ給へりしおりく、なとてあやなき

春佐比事仁川氣天毛左於毛八礼太天末川  
すさひ事につけてもさおもはれたてまつ

里氣無奈止登利可部左満本之宇人乃安利  
りけんなどとりかへさまほしう人のあり

左満遠美給尔徒遣天毛恋之左能奈久左武  
さまをみ給につけても恋しさのなくさむ

【明石】76

可多那氣礼者連以与利毛御文己満也可仁加幾  
かたなければいれいよりも御文こまやかにかき

給天於久尔満己止也我奈可良心与利本可奈流  
給ておくにまことや我なから心よりほかなる

奈越左利己止尔天宇登末礼多天末川利之  
なをさりことにてうとまれたてまつりし

布之く、遠思出留左部武祢己多幾仁又安也志  
ふしく、を思出るさへむねいたきに又あやし

久物波可奈幾由女遠己曾美侍之可加宇幾己  
く物はかなきゆめをこそみ侍しかかうきこ

由留止者須可多利尔部多天奈幾心乃本止八於  
ゆるとはすかたりにへたてなき心のほとはお

本之安八世与知可比之事毛奈止加幾天何  
ほしあはせよちかひし事もなとかきて何

事尔川氣天毛  
事につけても

志本く、登末川曾奈可流、可利楚女能美留女八  
しほく、とまつそなかる、かりそめのみるめは

【明石】 77

安方能春佐比奈礼登毛止安流御可部利何己、呂  
あまのすさひなれともとある御かへり何こゝろ

那久羅宇多氣仁可幾天者天仁志乃比可祢多留  
なくらうたけにかきてはてにしのひかねたる

御夢可多利仁川遣天毛思安八世良流、事  
御夢かたりにつけても思あはせらるゝ事

於保可流  
おほかる

宇良那具毛思氣流可那契之遠末川  
うらなくも思けるかな契しをまつ

与利波八古衣之物曾登於比良可奈留物可良  
より波はこえし物そとおひらかなる物から

堂、奈良須可寸女給遍留遠以登安八礼尔  
たゝならずかすめ給へるをいとあはれに

宇知遠幾可多久美給天奈己利比左之宇志乃  
うちをきかたくみ給てなこりひさしうしの

比能旅祢毛之給八寸女思之裳志留幾仁今  
ひの旅ねもし給はず女思しもしるきに今

【明石】 78

楚滿己止尔身毛奈計川部幾心知寸留行春衛  
そまことに身もなけつへき心ちする行すゑ

美之可氣奈流於也八可利遠太能毛之幾物尔天  
みしかけなるおやはかりをたのもしき物にて

以徒乃与仁人奈三く尔奈留部幾身止八思者  
いつのよに人なみくになるへき身とは思は

佐利之可止太、曾己波可登奈久天春久之  
さりしかとたゝそこはかとなくてすくし

徒留止之月八奈仁事仁可心遠毛奈也末之  
つるとし月はなに事にか心をもなやまし

氣无加宇以三之宇物思八之幾世尔己曾安利  
けんかういみしう物思はしき世にこそあり

計連登可祢天遠之八可利思之与利毛与呂川  
けれとかねてをしはかり思しよりもよろつ

仁可那之氣礼登奈多羅可尔毛天奈之天  
にかなしけれとなたらかにもてなして

尔久可良奴左滿尔美衣多末川留安八礼登波  
にくからぬさまにみえたてまつるあはれとは

【明石】79

月日仁曾遍天於保之末世登屋武事  
月日にそへておほしませとやむ事

奈幾可多能於保川可那久天年月遠春久之  
なきかたのおほつかなくて年月をすくし

太末比多、奈良春宇知於毛比於己世給覽  
たまひたゝならすうちおもひおこせ給覽

可以登心久流之氣礼盤比止利婦之可知尔天春  
かいと心くるしければひとりふしかちにてす

久之給惠遠左滿く可幾安川女天思不事共  
くし給惠をさまくかきあつめて思ふ事共

可幾川氣加部利事幾久部幾左滿尔志那之  
かきつけかへり事きくへきさまにしなし

給部利美武人乃心尔志三奴部幾物乃左滿也  
給へりみむ人の心にしみぬへき物のさま也

以可天可楚良仁加与不御心奈良武二条乃君毛  
いかてかそらにかよふ御心ならむ二条の君も

物安八礼尔奈久左无方奈久於保衣太末不折  
物あはれになくさむ方なくおほえたまふ折

【明石】80

於利於奈之屋宇仁絵遠加幾安川女給川、  
おりおなしやうに絵をかきあつめ給つ、

也可天我御安里左滿遠仁幾能屋宇仁可幾  
やかて我御ありさまをにきのやうにかき

給部利以可奈留部幾御安利左滿止毛仁可安良武  
給へりいかなるへき御ありさまともにかあらむ

止之可八利奴尔御久春利能事安利天  
としかはりぬ内に御くすりの事ありて

世の中左滿く尔能之流当代乃御己八右大  
世の中さまくにのゝする当代の御こは右大

臣能御武春女乃承香殿乃女御能御者良  
臣の御むすめの承香殿の女御の御はら

於止己宮武万礼給部累二尔奈利給部八以止以者  
おとこ宮むまれ給へる二になり給へはいといは

氣那東宮尔己曾八由川利幾古衣給八女於保  
けな東宮にこそはゆつりきこえ給はめおほ

屋遣乃御宇之路三遠之世越末川利己徒部  
やけの御うしろみをし世をまつりこつへ

【明石】 81

幾人遠於保之女久良春仁此源氏乃加宇  
き人をおほしめくらすに此源氏のかう

志川見給己止以登安多良志宇阿留滿之幾古止  
しつみ給こといとあたらしうあるましきこと

奈礼八徒并尔幾佐能御以佐免遠毛楚武  
なれはつぬにきさきの御いさめをもそむ

幾帝由留佐連給奴部幾佐多女以天幾奴  
きてゆるされ給ぬへきさためいてきぬ

己曾与利幾佐能毛御物乃氣仁奈也見給  
こそよりきさきも御物のけになやみ給

佐万く能物乃佐止之志幾利左波可之幾越  
さまくの物のさとしきりさはかしきを

以美之幾御徒、之三止毛越之給志流之丹也  
いみしき御つゝしみともをし給しるしにや

与呂志宇於八之末之氣流御女能奈也見  
よろしうおはしましける御めのなやみ

佐部己能己呂遠毛久奈良世給天物心本曾久  
さへこのころをもくならせ給て物心ほそく

【明石】 82

於本左礼氣礼は七月廿与日濃本止尔末多  
おほされければ七月廿よ日のほとにまた

加左祢天京部歸利給部幾世无之久多留川井  
かさねて京へ歸り給へきせんしくたるつゐ

事登思之可止世乃川祢奈幾仁川氣天毛  
事と思しかと世のつねなきにつけても

以可尔奈利者川遍幾仁可登奈計幾給越  
いかになりはつへきにかとなけき給を

加宇仁者可奈和八宇礼之幾仁曾部天毛又己乃  
かうにはかなわはうれしきにそへても又この

浦遠以滿八登思者那礼无事遠於毛本之  
浦をいまはと思はなれん事をおもほし

奈氣久仁入道佐留部幾己止、思奈可良宇知幾  
なけくに入道さるへきこと、思なからうちき

具与利武祢不多可利天於保遊連登思  
くよりむねふたかりておほゆれと思

乃己止佐可部給八、古曾八我思乃加奈不耳盤  
のことさかへ給は、こそは我思のかなふには

【明石】83

安良女奈止於毛比奈越春曾能比盤夜可礼奈具  
あらめなどおもひなをすその比は夜かれなく

可多良比給六月八可利与利心久留之幾氣之  
かたらひ給六月はかりより心くるしきけし

幾安里天奈也見氣利加久和可礼給部幾程  
きありてなやみけりかくわかれ給へき程

奈礼八安也仁久奈留尔也安里氣无安里之  
なれはあやにくなるにやありけんありし

与利毛阿八礼尔於保之天安屋之宇物思不  
よりもあはれにおほしてあやしう物思ふ

遍幾身仁毛安利氣留可那止於保之三多留  
へき身にもありけるかなとおほしみたる

女八佐良尔毛以八寸思之川三多利以登己止八利  
女はさらにもいはす思しつみたりいとことほり

奈利也思乃保可尔可奈之幾道尔以天多知  
なりや思のほかになしき道にいてたち

給之可登徒井尔八行女久利奈无止可川盤  
給しかとつゐには行めぐりなにかつは

【明石】84

於保之奈久佐女幾已能多比盤宇礼之幾可多  
おほしなくさめきこのたひはうれしきかた

乃御出多知能又也者返美留部幾止於保春  
の御出たちの又やは返みるへきとおほす

尔安八礼奈利佐不良婦人く毛本止く尔川氣天  
にあはれなりさふらふ人くもほとくにつけて

盤与呂己比思京与利毛御武可部尔人く万以利  
はよろこひ思京よりも御むかへに人くまいり

心知与氣奈留遠安流之乃入道涙尔久礼天  
心ちよけなるをあるしの入道涙にくれて

月毛多知怒本止左部安八礼奈留空乃氣之  
月もたちぬほとさへあはれる空のけし

幾仁奈曾也心川可良以万毛武可之毛春、路  
きになそや心つからいまもむかしもつゝろ

奈留事尔天身遠者不良可春覽止左満く尔  
なる事にて身をはふらかす覽とさまくに

於保之三多留心越之連類人く八安那仁久連  
おほしみたる心をしれる人くはあなにくれ

【明石】 85

以能御久世曾止美多末末川利武川可留女利月古呂八  
いの御くせそとみたてまつりむつかるめり月ころは

川遊入尔氣之幾美世寸時く可万幾礼奈止  
つゆ人にけしきみせず時くかいまきれなど

志給徒留川礼奈左越己能比安也尔久仁中く能入  
し給つるつれなさをこの比あやにくに中くの人

乃心徒久之尔止徒幾之呂不少納言志流部之天  
の心つくしにとつきしろふ少納言しるへして

幾古衣出之八之女能事奈止佐、女幾安部流  
きこえ出しはしめの事なとき、めきあへる

遠多、奈良春思遍利安左天波可利仁奈利天  
をた、ならず思へりあさてはかりになりて

連以乃屋字仁以太久毛婦可左天王多利給部利  
れのやうにいたくもふかさてわたり給へり

佐也可仁毛末多美多万八奴可多知奈止以止与之く  
さやかにもまたみたまはぬかたちなといとよしく

志宇氣多可幾左満之天女佐万志宇毛阿利  
しうけたかきさましてめさましようもあり

【明石】 86

希留可那登美春天可多良兼(宇)久知於之宇於保佐留  
けるかなとみすてかたら兼(う)くちおしうおほさる

左留部幾佐万仁志天武可遍无止於保之奈利奴  
さるへきさまにしてむかへんとおほしなりぬ

左也宇尔曾可多良比奈久佐女給於止己能御可多知  
さやうにそかたらひなくさめ給おとこの御かたち

安利左満八多佐良尔兼以者須年比乃御遠己  
ありさまはたさらにもいはす年比の御をこ

奈比尔以太宇於毛也世給部流之毛以不可多奈  
なひにいたうおもやせ給へるしもいふかたな

具女天多幾御安利左満尔天心久流之氣那留  
くめてたき御ありさまにて心くるしけなる

氣之幾仁宇知涙久三津、安八礼不可久契給  
けしきにうち涙くみつ、あはれふかく契給

遍留八多、可波可利遠左以者以尔天毛奈止加  
へるはた、かはかりをさいはいにてもなとか

也万佐良无登末天楚見遊連登女天太幾  
やまさらむとまでそ見ゆれとめてたき

【明石】 87

仁之毛我身乃本止遠思裳徒幾世春奈見能  
にしも我身のほとを思もつきせずなみの

己惠秋乃風尔八奈越比、幾古登奈利塩也久  
こ象秋の風にはなをひゝきことなり塩やく

煙可寸加尔多那比幾天止利集多留所能様也  
煙かすかにたなひきてとり集たる所の様也

古乃多比盤多地王可流止毛毛之保也久  
このたひはたちわかるとももしほやく

煙盤於那之可多仁奈比可无止乃多末部盤  
煙はおなしかたになひかんとのためへは

加幾徒女天安万乃多久藻乃思尔毛以末八  
かきつめてあまのたく藻の思にもいまは

可比奈幾字良見太尔世之安八礼尔字知奈幾天  
かひなきうらみたにせしあはれにうちなきて

古止春久那、留物可良佐留部幾布之能御以良部奈止  
ことすくなゝる物からさるへきふしの御いらへなと

阿左可良須幾己遊此川祢尔遊可之可利給物  
あさからすきこゆ此つねにゆかしかり給物

【明石】 88

乃祢奈止佐良尔幾可世多末川良左利徒留遠  
のねなどさらనికిかせてまつらさつるを

以三之宇根太末不佐良八可多見尔毛志乃不波可  
いみしう恨たまふさらはかたみにもしのふはか

里乃一古止遠多尔止乃給天京与利毛天  
りの一ことをたにとの給て京よりもて

於八之多利之幾无乃御古止利仁川可八之天  
おはしたりしきんの御こととりにつかはして

心古止奈留志良部遠保乃可仁可幾奈良之給部留  
心ことなるしらへをほのかにかきならし給へる

婦可幾夜乃春免留八太止部无方奈之入道  
ふかき夜のすめるはたとへん方なし入道

盈多部天身川可良志也字乃古止越止利天  
えたへて身つからしやうのことをとりて

佐之以連多里三川可良毛以止、涙佐部曾、能可  
さしいれたりみつからまいとゝ涙さへそゝのか

左礼天止、武部幾可多奈幾仁佐曾八留、奈留  
されてとゝむへきかたなきにさそはるゝなる



【明石】 89

遍之忍比也可仁志良部多留本止以上春免幾  
へし忍ひやかにしらへたるほといと上すめき

太里入道乃宮乃御琴乃音遠多、今乃又  
たり入道の宮の御琴の音をたゝ今の又

奈幾物尔思幾古衣多留八以満女可之宇安那女天  
なき物に思きこえたるはいまめかしうあなめて

太登幾久人乃心由幾天加多知佐遍思屋良  
たときく人の心ゆきてかたちさへ思やら

流ゝ事盤气尔以登加幾里奈幾御古止乃祢也  
るゝ事はけにいとかきりなき御ことのね也

己礼盤安貝末天比幾春満之心尔久、祢多幾  
これはあくまでひきすまし心にくゝねたき

祢曾万佐連流己乃御心尔太尔八之女天阿者  
ねそまされるこの御心にたにはしめてあは

連尔奈川可志宇末多美、奈礼給八奴天奈止  
れになつかしうまたみゝなれ給はぬてなと

心屋末之幾程尔比幾佐之川、安可春於保  
心やましき程にひきさしつゝあかすおほ

【明石】 90

左留ゝ仁毛月己呂奈止志為天毛幾ゝ奈良佐ゝ  
さるゝにも月ころなとしぬてもきゝならさゝ

里徒良武登久也志宇於保左流心能可幾利  
りつらむとくやしうおほさる心のかきり

行佐幾乃契遠乃三之給幾武盤又可幾  
行さきの契をのみし給きむは又かき

安八寸留末天乃可多見耳登乃給女  
あはするまでのかたみにとの給女

奈越左利尔太乃免遠久女留比止己止越  
なをさりにたのめをくめるひとことを

川幾世奴祢尔也加気天志乃者武以不止毛  
つきせぬねにやかけてしのはむいふとも

奈幾久知春左比遠恨多万飛天  
なきくちすさひを恨たまひて

安不万天乃可多見尔知幾留中能遠乃志良  
あふまでのかたみにちきる中ののをしら

遍盤古止尔加八良佐良奈武己能祢多可八奴  
へはことにかはらさらなむこのねたかはぬ

【明石】 91

佐幾爾加奈良春安比三无登太乃女給免里  
さきになららずあひみんとたのめ給めり

左礼登多、王可礼无本止乃王利那左遠思武  
されとた、わかれんほとどのわりなさを思む

世多留毛以登己止八利也多知給安可川幾八夜不可  
せたるもいとことほり也たち給あかつきは夜ふか

宇以天給天御武可部乃人く毛佐者可之氣礼盤  
ういて給て御むかへの人くもさはかしければ

心毛空奈礼登人末遠波可良比天  
心も空なれと人まをはからひて

宇地春天、多川毛可那之幾浦奈見能奈  
うちすて、たつもかなしき浦なみのな

己利以可仁止思屋流可那御可部利  
こりいかにと思やるかな御かへり

年部徒留止万屋毛安礼天宇幾浪能返留  
年へつるとまやもあれてうき浪の返る

方尔也身遠多久部末之止宇知思日氣類  
方にや身をたくへましとうち思ひける

【明石】 92

満、奈利氣流遠美給尔志乃比給部登本  
ま、なりけるをみ給にしのひ給へとほ

呂く登己本連奴心志良奴人く盤猶可、流御  
ろくとこほれぬ心しらぬ人くは猶かゝる御

春万井奈礼止登之己呂登以不八可利奈連  
すまぬなれととしころといふはかりなれ

給部留遠今八登於保春八佐毛安流事曾  
給へるを今はおほすはさもある事ぞ

可之奈止三多天末川留与之幾与奈止八於路  
かしなとみたてまつるよきよなとはおろ

加奈良春於保春奈女利可之登仁久、楚思  
かならずおほすなめりかしとにく、ぞ思

宇礼之幾仁毛氣尔氣不遠加幾利仁己乃  
うれしきにもけにけふをかきりにこの

奈幾左越別留、己登奈止阿八礼可利天  
なきさを別る、ことなとあはれかりて

久知く志本多礼以比安部流事止毛阿免利  
くちくしほたれいひあへる事ともあめり

【明石】 93

佐連登何可八止天奈无人道介不乃御末宇気  
されと何かはとてなん入道けふの御まうけ

以登以可女之宇川可宇末川連利人く志毛能志那  
いとかめしうつかうまつれり人くしものしな

末天旅乃佐宇曾久女川良之幾左満奈利以川能  
まで旅のさうそくめつらしきさまなりいつの

満尔可志安部氣无登美衣多利御与楚比盤以不  
まにかしあへんとみえたり御よそひはいふ

部久毛安良春美曾比川阿末多可計左不良者春  
へくもあらずみそひつあまたかけさふらはす

満已止能都乃川止尔志川部幾御遠久利物奈登  
まことの都のつとにしつへき御をくり物なと

遊衣川幾天思与良奴久満奈之氣不多天万  
ゆえつきて思よらぬくまなしけふたてま

川留部幾可利乃御左宇曾久耳  
つるへきかりの御さうそくに

与流奈三仁立加左祢堂留旅衣志本止氣  
よるなみに立かさねたる旅衣しほとけ

【明石】 94

志止也人乃以止八武止安流遠御覽之川気天  
しとや人のいとはむとあるを御覽しつけて

佐者可之氣礼登  
さはかしけれど

加多見尔楚可不部可利氣流安不已止能日可春  
かたみにそかふへかりけるあふことの日かず

部多天无中能己呂毛遠心佐之安留越止天多天  
へたてん中のころもを心さしあるをとてたて

末川留可婦御身尔奈礼多留止毛越徒可者須  
まつるかふ御身になれたるともをつかはす

氣仁以末比止部志乃者礼給部幾己止遠曾不留  
けにいまひとへしのはれ給へきことをそふる

可多見奈女利盈奈良奴御曾仁、於此乃乃  
かたみなめりえならぬ御そに、おひのう

徒利多類遠以可、人乃心尔毛志女佐良武入道  
つりたるをいか、人の心にもしめさむら入道

以万八止世遠者那連待尔之身奈礼止毛氣不  
いまはと世をはなれ待にし身なれともけふ

【明石】95

乃御遠久里尔川可不末川良奴事奈止申天加比の御をくりにつかふまつらぬ事など申てかひ

遠徒具流毛以登於之奈可良王可幾人盤王良比をつくるもいとおしなからわかき人はわらひ

努部之

ぬへし

与越字見尔古、良志本之武身登奈利天よをうみにこゝらしほしむ身となりて

猶己乃岸遠盈己曾者那連祢心乃屋三耳猶この岸をえこそはなれね心のやみに

以止、滿止比奴遍久侍連盤佐可比末天多尔止いと、まとひぬへく侍ればさかひまでたにと

幾古衣天春幾くく之幾左滿奈礼止於保之きこえてすきくしきさまなれとおほし

以天左世給於利侍良盤奈止御氣之幾太方いてさせ給おり侍らはなと御けしきたま

波留以三之宇物遠安八礼止於保之天止己呂くはるいみしう物をあはれとおほしてところく

【明石】96

宇知安可三給部流御万見乃王多利奈止以八无可多うちあかみ給へる御まみのわたりなといはむかた

奈久美衣給不思春天可多幾春地毛安女礼盤なくみえ給ふ思てかたきすちもあめれば

以末以登、久三奈越之給天无多、己乃春三いまいとくみなをし給てんた、このすみ

可己曾美春天可多氣礼以可、春部幾登天かこそみすてかたけれいか、すへきとて

宮己出之春能奈氣幾尔於止良免也宮こ出し春のなけきにおとらめや

止之布留浦遠別奴留秋止天遠之能己比太としふる浦を別ぬる秋とてをしのかひた

万部流尔以止、物於保衣春志多礼万佐留立為毛まへるにいと物おほえすしたれまざる立ぬも

阿左末之宇与呂本不佐宇之三乃心地盤太登婦あさましうよろほふさうしみの心ちはたとふ

遍幾可多那久天加宇志毛尔美衣之止思ひへきかたなくてかうしも人にみえしと思ひ

【明石】 97

志川武礼登身能宇幾越毛止尔天玉利奈幾已止  
しつむれと身のうきをもとにてわりなきこと

奈礼止宇地春天給部流恨乃屋留可多奈幾耳  
なれとうちすて給へる恨のやるかたなきに

堂氣幾古止、八多、涙尔志川女利八、君裳  
たけきこと、はた、涙にしつめりは、君も

那久左免王比天奈尔、加具心徒久之奈留事  
なくさめわひてなに、かく心つくしなる事

遠思楚女遣无春部天比可く之幾人尔志多  
を思ぞめけんすへてひかくしき人にした

可比尔氣流心乃於己多利曾登以不安那  
かひにける心のおこたりそといふあな

加万也於保之春川末之幾古止毛物之給女礼八  
かまやおほしすつましきことも物し給めれば

左利止毛於保春所安良武思奈久左免天御遊  
ざりともおほす所あらむ思なくさめて御ゆ

奈止遠多仁万以連遊、之也止天可多春美尔  
などをたにまいれゆ、しやとてかたすみに

【明石】 98

与利為多利女乃登波、君奈止比可女留心遠  
よりぬたりめのは、君などひかめる心を

以比安八世川、以川之可以可天思左満尔天美多  
いひあはせつ、いつしかいかて思さまにみた

天末川良武止年月遠太乃三春久之今也  
てまつらむと年月をたのみすくし今や

思加奈不止己曾多能三幾古衣川連心久留之幾  
思かなふとこそたのみきこえつれ心くるしき

事遠毛物乃八之女耳美留可那登奈氣久遠  
事をも物のはしめにみるかなとなけくを

美留丹毛以止於之氣礼盤以止、本氣良礼天比留  
みるにもいとおしければいと、ほけられてひる

盤日悲止比以遠乃三称久良之与留八春久  
は日ひとひいをのみねくらしよるはずく

与可仁於幾并天春、乃行惠毛志良春成尔  
よかにおきぬてす、の行ゑもしらす成に

氣流止天手遠、之春里天安不幾為  
けるとて手を、しすりてあふきぬ

【明石】 99

堂利天之止毛尔安者女良礼天月夜尔出  
たりてしどもにあはめられて月夜に出

天幾也宇多宇春留毛乃盤屋利水尔太不連  
てきやうたうするものはやり水にたふれ

以利尔氣利与之阿留岩乃可多楚者仁古之毛  
いりにけりよしある岩のかたそほにこしも

川幾楚己奈比也見不之太留本止尔奈无春己之  
つきそこなひやみふしたるほとになんすこし

物万幾礼氣流君盤奈尔者乃可多仁王多  
物まきける君はなにはのかたにわた

里天御八良部之給天住与之仁毛多以良可  
りて御はらへし給て住よしにもたいらか

尔天以呂く願者多之申部幾与之御川可以之  
にていろく願はたし申へきよし御つかいし

天申左世給尔八可尔所世宇天身川可良八此  
て申させ給にはかに所せうて身つからは此

多比盈未宇天多満八春古止那留御世宇与宇  
たひえまうてたまはずことなる御せうよう

【明石】 100

奈止奈久天以曾幾以利給努二条院尔於八之  
などなくていそきいり給ぬ二条院におはし

末之川幾天己乃人毛御止毛乃人裳夢能心知  
ましつきてこの人も御とももの人も夢の心地

志天行安比与呂己比奈幾止毛由志幾末天  
して行あひよろこひなきともゆゝしまて

多知佐八幾多利女君裳可比奈幾物耳  
たちさはきたり女君もかひなき物に

於保之春天川留命宇礼之宇於保左留良武可之  
おほしすてつる命うれしうおほさるらむかし

以止宇川久之氣尔祢比止、乃本利天御物  
いとうつくしけにねひとゝのほりて御物

思乃程尔所世可利之御久之乃春己之遍  
思の程に所せかりし御くしのすこしへ

可礼多流之毛以三之宇女天多幾遠以末八可久  
かれたるしもいみしうめてたきをいまはかく

天美留部幾楚可之止御心遠知井留耳  
てみるへきそかしと御心をちゐるに

【明石】 101

川氣天八又可能安可春王可礼之人乃思遍利之  
つけては又かのあかすわかれし人の思へりし

左満心久留之宇於保之屋良留猶与止、毛仁  
さま心くるしうおほしやらる猶よと、もに

可、流可多尔天御心乃以止満曾奈幾也曾能人  
かゝるかたにて御心のいとまそなきやその人

乃事止毛奈止幾古衣以天給部利於保之出  
の事ともなときこえて給へりおほし出

太留御氣之幾安左可良須見遊留遠多、那  
たる御けしきあさからすみゆるをたゝな

良春也美多末天末川利給不良武王佐止奈良春  
らすやみたてまつり給ふらむわざとならず

見遠八思八寸奈止本乃女可之給曾於可之宇羅  
みをは思はずなとほのめかし給そおかしうら

宇太久於毛比幾古衣給可川美留末、仁多尔  
うたかおもひきこえ給かつみるまゝにたに

安可奴御左満遠以可天部多天徒留止之月曾止  
あかぬ御さまをいかてへたてつるとし月ぞと

【明石】 102

安左末之幾末天於毛本春仁止利可部之  
あさましきまておもほすにとりかへし

世乃中毛以登宇良女之宇奈无本止毛奈久  
世の中もいとうらめしうなんほともなく

毛止乃御久良為阿良多末利天可寸与利本可  
もとの御くらぬあらたまりてかすよりほか

乃権大納言尔奈利給川幾く、能人毛左流  
の権大納言になり給つきく、の人もさる

部幾可起利盤毛止能川可左返給八利与仁  
へきかきりはもとのつかさ返給はりよに

遊留左留、程枯多利之木能春仁安部流  
ゆるさるゝ程枯たりし木の春にあへる

心知之天以止女天多遣也女之安利天内尔  
心ちしていとめてたけ也めしありて内に

万以利太末不御末部尔左不良比給尔称比  
まいらたまふ御まへにさふらひ給にねひ

満左利天以可天左留物武川可之幾春万井  
まさりていかてさる物むつかしきすまゐ

【明石】 103

尔年部給比川良武止美多天末川留女房奈止  
に年へ給ひつらむとみたてまつる女房など

乃院乃御時与利左不良比天遠以之良部留  
の院の御時よりさふらひてをいしらへる

止毛八可那之久天以万佐良尔奈幾佐者幾  
ともはかなしくていまさらになきさはき

女天幾己遊上裳八川可之宇佐部於保左礼天  
めてきこゆ上もはつかしうさへおほされて

御与曾比奈止己止尔日幾川久呂比天以天  
御よそひなとことにひきつくるひていて

於八之万須御心知連以奈良春日己呂部左世  
おはします御心ちれいならず日ころへさせ

給部流遠幾乃不介不楚春己之与呂之宇  
給へるをきのふけふそすこしよろしう

於本左礼氣流御物語志女也可仁安利天  
おほされける御物語しめやかにありて

夜尔入奴十五夜乃月於毛之呂不志川可  
夜に入ぬ十五夜の月おもしろふしつか

【明石】 104

奈留尔武可之能事加幾久川之於保之  
なるにむかしの事かきくつしおほし

出良礼天志本多礼左世給毛能心本曾久  
出られてしほたれさせ給もの心ほそく

於保左留、奈留部之安曾比奈止毛世春  
おほさるゝなるへしあそひなともせず

武可之幾、之物乃祢奈止毛幾可天久  
むかしきゝし物のねなともきかて久

志宇奈里尔氣類可那登乃多満者春類尔  
しうなりにけるかなとのたまはするに

王多川宇見尔志川見宇良不連比留能子乃  
わたつうみにしつみうらふれひるの子の

阿之多、佐利之年八部尔氣利止幾己衣給部八  
あしたゝさりし年はへにけりとときこえ給へは

以止安八礼尔心者川可之宇於保左礼天  
いとあはれに心はつかしうおほされて

宮八之良女久利安比氣留時之安礼盤  
宮はしらめくりあひける時しあれば



【明石】  
105

王可礼之春乃宇良見乃己春那止以止奈満  
わかれし春のうらみのこすなといとなま

女可之幾御有様奈利院乃御太女尔御八講  
めかしき御有様なり院の御ために御八講

遠已奈八留部幾事末川以楚可世給東宮  
をこなはるへき事まついそかせ給東宮

遠美多末末川利給尔己与奈久於与春氣  
をみたてまつり給にこよなくおよすけ

左世給天女川良志宇於本之与呂己比給部留  
させ給てめつらしうおほしよろこひ給へる

遠可幾利奈久阿者礼止美多末末川利給御  
をかきりなくあはれとみたてまつり給御

左部毛己与那久満左良世多万比天世遠  
さへもこよなくまさらせたまひて世を

多毛知給八无尔波、可利安留末之宇加之  
たもち給はんには、かりあるましようかし

古宇美衣左世給人道乃宮仁毛御心春己之  
こうみえさせ給人道の宮にも御心すこし

【明石】  
106

志川女天御多以女无乃本止耳毛安者礼  
しつめて御たいめんのほとにもあはれ

奈留事止毛安覽可之満己止也可乃  
なる事ともあ覽かしまことやかの

安可之尔八可部流波尔川遣天御文川可八寸  
あかしにはかへる波につけて御文つかはず

比幾可部之天己万也可尔可幾給女利  
ひきかへしてこまやかにかき給めり

奈見（乃）与留く以可尔  
なみ（の）よるくいかに

奈氣幾川、安可之能浦尔朝露能多川  
なけきつゝあかしの浦に朝霧のたつ

也止人遠思屋留可那可能曾知乃武春女乃  
やと人を思やるかなかのそちのむすめの

五世知安以奈宇人之礼奴物思佐女奴留  
五せちあいなう人しれぬ物思さめぬる

心知之天満久奈幾徒久良世天佐之  
心ちしてまくなきつくらせてさし

【明石】 107

遠可世氣利  
をかせけり

春満乃浦尔心遠与世之布那人乃也可  
すまの浦に心をよせしふな人のやか

天久多世類袖遠美世八也天奈止己与奈久  
てくたせる袖をみせはやてなとこよなく

満左利仁氣利止見於保世給天徒可八寸  
まさりにけりと見おほせ給てつかはず

加遍利天盤加己止也世末之与世太里之  
かへりてはかことやせましよせたりし

奈古利仁袖乃比可多可利之越安可寸於可之  
なこりに袖のひかたかりしをあかすおかし

登於保志、奈古利奈礼盤於止呂可佐連多  
とおほし、なこりなれはおとろかさされた

末比天以止、於本之以用礼止此己呂盤  
まひていと、おほしいつれと此ころは

左也宇乃御布留万比佐良耳徒、三給  
さやうの御ふるまひさらにつ、み給

【明石】 108

女里花知留里奈止仁毛多、御世字楚  
めり花ちる里なにもた、御せうそ

己奈登八可利尔天於本川可奈久中く  
こなどはかりにておほつかなく中く

宇良女之氣奈里  
うらめしけなり

【落標】 1

三越津久之  
みをつくし

【落標】 2

三越津久之  
みをつくし

勸修寺宮常信法親王  
勸修寺宮常信法親王

大正大学本の翻刻『源氏物語』（明石・落標）

五九

【落標】 3

【落標】 4

【濔標】 5

佐也可丹見衣給之夢能後八院乃美可止農  
さやかに見え給し夢の後は院のみかとの

御己止遠心耳可希幾古衣給天以可天可乃志徒三太  
御ことを心にかけきこえ給ていかてかのしつみた

末不良武徒三春久比多天末川留事越世无止於保  
まふらむつみすくひたてまつる事をせんとおほ

之奈計幾希類遠閑久可部利太末比天八曾能御  
しなけきけるをかくかへりたまひてはその御

以曾起之給神奈月尔御八講志給世乃人能奈比  
いそきし給神な月に御八講し給世の人のなひ

幾徒可宇末川留事武可之能也宇奈利於保幾  
きつかうまつる事むかしのやうなりおほき

左起御奈也三遠毛久於八之滿春宇知尔毛徒井尔  
さき御なやみをもくおはしますうちにもつゐに

古乃人遠衣希多春奈利奈无事止心也三於保  
この人をえけたすなりなん事と心やみおほ

之希礼止美可止八院農御由以古武遠思幾古衣給  
しけれとみかとは院の御ゆいこむを思きこえ給

【濔標】 6

毛乃、武久以安利奴部久於本の希留遠奈越之太  
ものゝむくいありぬへくおほしけるをなをした

天給天御心地す、志久奈武於保之希留時々於古利  
て給て御心ちす、しくなむおほしける時々おこり

奈也滿世給之御女毛佐者也幾給奴礼止於保可多世  
なやませ給し御めもさはやき給ぬれとおほかた世

丹衣奈可久安類末之宇心保曾起事止乃三比左之  
にえなかくあるましよう心ほそき事とのみひさし

可良奴事越於保之徒、川弥尔女之安利天源氏  
からぬ事をおほしつゝつねにめしありて源氏

の君者末以利給世中乃事奈止毛遍多奈奈  
の君はまいり給世中の事などもへたてな

久乃太末八勢徒、御本以乃屋宇奈礼者於保可多  
くのたまはせつ、御本のやうなれはおほかた

能世乃人毛安以奈久宇礼之幾事丹与呂己比幾  
の世の人もあいなくうれしき事によるこひき

古衣希類於利為奈武乃御心徒可比知可久奈利奴  
こえけるおりあなむの御心つかひちかくなりぬ

【落標】 7

流尔毛内侍乃可三心保曾計丹与遠於毛比奈計  
るにも内侍のかみ心ほそけによをおもひなけ

幾給部留以止安八礼尔於保左礼希利於止、宇世給大  
き給へるいとあはれにおほされけりおと、うせ給大

宮毛太乃毛之希那久乃三奈利給部留尔王可世能  
宮もたのもしけなくのみなり給へるにわか世の

古利寸久奈起心知春流尔奈武以止、於之宇奈  
こりすくなき心ちするになむいとくおしうな

己利奈幾佐満尔天止満利給八武止春良无昔与利  
こりなきさまにてとまり給はむとすらん昔より

人耳八思於止之給川連止身徒可良能心佐之農又  
人には思おとし給つれとみつからの心さしの又

奈起奈良比尔多、御事乃三奈武安八礼尔於保衣  
なきならひにた、御事のみなむあはれにおほえ

希類多知満左流人又御本以安利天美太末不止毛  
けるたまさる人又御本いありてみたまふとも

遠呂可奈良奴心佐之八盈志毛奈寸良八佐良无登  
をろかならぬ心さしはえしもなすらはさらんと

【落標】 8

思不佐部己曾心久流之介礼止天宇知奈起給不女君  
思ふさへこそ心くるしけれとてうちなき給ふ女君

可本八以止安可久尔本比帝己保留八可利乃御安以行  
かほはいとあかくにほひてこほるはかりの御あい行

尔天涙毛古保連奴留遠与呂徒乃徒三王春礼天  
にて涙もこほれぬるをよるつつつみわすれて

安八礼尔良字太之止御良无世良留奈止可美己遠  
あはれにらうたしと御らんせらるなとかみこそ

多仁毛多満部留末之幾久知於之宇毛安留可那  
たにもたまへるましきくちおしうもあるかな

契布可起人農多女尔八以満美以天給天武止思不  
契ふかき人のためにはいまみいて給てむと思ふ

久知於之也可起利安連八多、人尔天曾美多満八无  
くちおしやかきりあればた、人にてそみたまはん

閑之奈止行末乃事越佐部乃多満八春流尔以  
かしなと行末の事をさえたのまはするにい

止者川可之宇毛可奈之宇毛於保衣給御可多知奈止  
とはつかしうもかなしうもおほえ給御かちちなと

【濔標】 9

奈満女可之宇幾与良尔天可起利奈起御心佐之乃  
なまめかしうきよらにてかきりなき御心さしの

止之月尔曾不也宇仁毛天奈左勢給尔女天多起  
とし月にそうやうにもてなさせ給にめてたき

人奈連止佐之毛思日給遍良佐利之気之幾心  
人なれとさしも思ひ給へらさりしけしき心

者部奈止毛乃思志良礼太末不、丹奈止天王可心乃  
はへなとも思しられたまふまゝになどかわか心の

和可久以者計奈起尔満可勢天左留佐八起遠左部  
わかくいほけなきにまかせてさるさはきをさへ

比幾以天、王可名遠八左良丹毛以八春人乃御太女  
ひきいて、わか名をはさらにもいはず人の御ため

佐部奈止於保之以徒類尔以止宇起御身奈利安久流  
さへなとおほしいつるにいとつき御身なりあくる

年能幾佐良幾耳春宮能御元服乃事安利  
年のきさらきに春宮の御元服の事あり

十一尔奈利給部止保止与利於保幾丹於止奈志宇幾  
十一になり給へとほとよりおほきにおとなしうき

【濔標】 10

与良丹天多、源氏農大納言乃御可本婦多徒尔  
よらにてた、源氏の大納言の御かほふたつに

宇徒之多良無也宇丹美衣給不以止満八由起  
うつしたらむやうにみえ給ふいとまはゆき

末天比可利安比給部留遠世人女天多起毛乃丹  
までひかりあひ給へるを世人めてたきものに

幾已由礼止者、宮八以美之宇可多八良以多起古登  
きこゆれとは、宮はいみしうかたはらいたきこと

尔安以奈具御心越徒久之太末不宇良尔毛女天  
にあいなく御心をつくしたまふうらにもめて

多之止美多天末川利給帝世中由川利幾古衣  
たしとみたてまつり給て世中ゆつきこえ

給部幾古止奈川可之宇幾已盛志良勢給於  
給へきこととなつかしうきこえしらせ給お

奈之月乃廿与日御久丹由川利乃事仁八可奈礼  
なし月の廿よ日御くにゆつりの事にはかなれ

者於保幾左起於本之安八天多利可比奈起左満  
はおほきさきおほしあはてたりかひなきさま

【濤標】 11

奈可良毛心乃止可丹御良武世良類部幾事越思不  
なからも心のとかに御らむせらるへき事を思ふ

奈利止楚幾古衣奈久佐女給希流坊丹八承香  
なりとそきこえなくさめ給ける坊には承香

殿乃美己為多末比奴世中安良太末利天比  
殿のみこみたまひぬ世中あらたまりてひ

幾可遍以末女可之幾事止毛於保可利源氏大  
きかへいまめかしき事ともおほかり源氏大

納言内大臣奈利給比怒可寸佐多末利帝  
納言内大臣になり給ひぬかすさたまりて

久徒呂具所毛奈可利希礼八久八、利給奈利  
くつろく所もなかりければは、り給なり

介利也可天世乃末川利己止越志多末不部幾奈礼止  
けりやかて世のまつりことをしたまふへきなれと

佐也字乃事志幾楚具尔八多遍須奈武止  
さやうの事しけきそくにはたへすなむと

天知之乃於止、撰政志太末不遍起与之由徒利  
てちしのおと、撰政したまふへきよしゆつり

【濤標】 12

幾古衣給不也末比尔与利天久良并越可遍  
きこえ給ふやまひによりてくらみをかへ

之多天末川利天之越以与く、老乃徒毛利曾  
したてまつりてしをいよく、老のつもりそ

比天佐可之幾事侍良之登宇計比幾申給八  
ひてさかしき事侍らしとうけひき申給は

寿人乃久丹、毛事宇川利世中佐多満良怒  
す人のくに、も事うつり世中さたまらぬ

於利八布可起山耳安止越多衣多流人多丹  
おりはふかき山にあとをたえたる人たに

毛於左末礼留世尔波志呂可三毛波知春以天  
もおさまれる世にはしろかみもはちすいて

徒可遍希留越己曾満己止乃比之里丹八志介礼  
つかへけるをこそまことのひしりにはしけれ

也末比尔志川三帝可遍之申給希留久良并  
やまひにしつみてかへし申給けるくらぬ

遠世中可八利天又安良太女給者武尔佐良丹止可  
を世中かはりて又あらため給はむにさらにとか



【濬標】 13

安流末之宇於保也希和多久之佐多女良類左留  
あるまじうおほやけたくしさをためらるさる

太女之毛安利希礼八春末比者天給八天太政大  
ためしもありければすまひはて給はて太政大

臣尔奈利給不御登之毛六十三尔曾奈利給  
臣尔奈利給ふ御としも六十三にそなり給

世中春左滿之幾尔与利閑徒八古毛利為太  
世中すさまじきによりかつはこもりぬた

末比之越止利可遍之波奈也幾給部八御子止  
まひしをとりかへしはなやき給へは御子と

毛奈止志川武也宇丹毛乃之給部留遠美奈宇可  
もなとしつむやうにもし給へるをみなうか

比給止利王起天宰相中将權中納言仁奈利  
ひ給とりわきて宰相中将權中納言になり

給可乃四乃君能御八良農比女君十二尔奈利給  
給かの四の君の御はらのひめ君十二になり給

遠宇知尔末以良世武止閑之徒幾太末不可乃  
をうちにまいらせむとかしつきたまふかの

【濬標】 14

多可左己宇多比之君毛可宇婦利世左勢天以  
たかさこうたひし君もかうふりせさせてい

止思不左滿奈利波良く丹御己止毛以止安末多徒  
と思ふさまなりはらくに御こともいとあまたつ

幾く丹於比以天徒、尔起八、志希奈流遠源  
きくにおひいてつ、にきは、しけなるを源

氏乃於止、八宇良也三給不大殿八良農王可幾美人  
氏のおと、はうらやみ給ふ大殿はらのわかきみ人

与利古止尔宇川久志宇天内春宮乃殿上之太  
よりことにうつくしうて内春宮の殿上した

末不己比女君乃宇世給尔之奈計幾越宮於止、  
まふこひめ君のうせ給にしなけきを宮おと、

又佐良丹安良太女天於保之奈氣久佐連止於者  
又さらにあらためておほしなけくされとおは

世奴奈己利毛多、古乃於止、能御比可利尔与呂  
せぬなこりもた、このおと、の御ひかりによる

徒尔毛天奈左礼給天止之己呂於保之志川三  
つにもてなされ給てとしころおほしつみ

【濡標】 15

徒留奈己利奈起末天佐可遍給不奈越武可之  
つるなこりなきまでさかへ給ふなをむかし

尔御心者部可八良寿於利婦之己止丹和多利給奈  
に御心はへかはらすおりふしことにわたり給な

止之徒、王可君乃御女能止多知佐良奴人く毛  
としつゝわか君の御めのとたちさらぬ人くも

年比農保止満可天知良左利希流八美那佐  
年比のほとまかてちらさりけるはみなさ

類部幾古止仁布礼徒、与寸可徒希武己止  
るへきことにふれつゝよすかつけむこと

遠於保之遠起徒留耳左以者以人於保久奈利  
をおほしをきつるにさいはい人おほくなり

奴遍之二条院尔毛於奈之古止満知幾  
ぬへし二条院にもおなしことまちき

古衣希流入遠安八礼奈留毛乃尔於保之天止  
こえける人をおはれなるものにおほしてと

之己呂農武祢安久波可利止於保勢八中將  
しころのむねあくはかりとおほせばは中将

【濡標】 16

中務也字能人く尔八本止く丹徒希津、奈左計  
中務やうの人くにはほとくにつけつゝなざけ

遠美衣給尔御以止満奈久天保可安利幾毛志太満  
をみえ給に御いとまなくてほかありきもしたま

八春二条院乃日武可之奈留宮院乃御世宇布武  
はす二条院のひむかしなる宮院の御せうふむ

奈利之遠尔奈久阿良太女徒久良勢太末不者那  
なりしをになくあらためつけらせたまふはな

知留佐登奈止也字能心久類之幾人く春満世  
ちるさとなどやうの心くるしき人くすませ

武奈止於保之安天、徒久呂八世給満己止也可  
むなどおほしあて、つくるはせ給まことやか

乃安可之尔心久流之希奈利之古止八以可尔止於  
のあかしに心くるしけなりしことはいかにとお

保之王春類、時奈希礼止於保也希和多久之以曾  
ほしわするゝ時なけれとおほやけわたくしいそ

可之幾満幾礼尔衣於保春満、尔毛止不良比多満  
かしきまきれにえおほすまゝ、にもとふらひたま

【濔標】 17

八左利希留越三月乃徒以多知能本止古乃己呂也止はさりけるを三月のついたちのほとこのころやと

於保之屋留耳人志礼寿安八礼尔天御徒可比安利おほしやるに人しれすあはれにて御つかひあり

希利止久可部利満以利天十六日尔奈武女耳天けりとくかへりまいりて十六日になむ女にて

多以良可丹毛乃之給止徒希幾已由女川良之幾たいらかにものし給とつけきこゆめつらしき

左満尔天佐部安那流遠於保春尔遠呂可奈良春さまにてさへあなるをおほすにをろかならず

奈止天京尔武可部天可、類古止遠毛世左勢左利なとて京にむかへてかゝることをもせさせさり

希武止久知於志宇於保左留春久衣宇仁御子三人けむとくちおしうおほざるすくえうに御子三人

美可止幾左起可奈良寿奈良比天宇末礼給部志みかときさきかならずならひてうまれ給へし

奈可乃於止利八太政大臣尔天久良為遠幾八武遍なかのおとりは太政大臣にてくらゐをきはむへ

【濔標】 18

之止可武可部申多利之古止佐之天可奈不奈安利しとかむかへ申たりしことさしてかなふなめり

於保可多閑三奈起久良為丹乃本利与越末川利おほかたかみなきくらゐにのほりよをまつり

古知給部幾事左八可利閑之己可利之安末多能こち給へき事はかりかしこかりしあまたの

佐宇人止毛乃幾古衣安川女多留越止之己呂八さう人ともものきこえあつめたるをとしころは

世乃王徒良八之左丹美奈於保之希知徒留遠多世のわつらはしきにみなおほしけちつるをた

宇多以乃閑久、良井丹可奈比給奴留己止越思能うたいのかくゝらゐにかなひ給ぬることを思の

己止宇礼之止於保春身川可良毛天者奈礼給部ことうれしとおほす身つからももてはなれ給へ

類春知八佐良丹安留満之幾古止、於保春阿末多るすちはさらにあるましきこと、おほすあまた

乃美己多知乃中丹春久礼天良宇多起毛乃のみこたちの中にすくれてらうたきもの

【落標】 19

耳於本之多利志可止太、人尔於保之遠起天希留  
におほしたりしかとた、人におほしをきてける

御心遠思尔春久勢止越可利希利宇知能閑久天  
御心を思にすくせとをかりけりうちのかくて

於八之滿春遠安良者丹人乃志留古止奈良称止佐  
おほしますをあらはに人のしることならねとさ

宇尔武乃己止武奈之可良春止御心乃内尔於保之  
うにむのことむなしからすと御心の内におほし

希利以滿由久末乃安良滿之事於保春仁寸三  
けりいまゆく末のあらまし事おほすにすみ

与之乃神乃志留遍滿己止丹閑乃人毛世丹奈部  
よしの神のしるへまことにかの人も世になへ

帝奈良怒春久世尔天比可く志幾於也毛於与比  
てならぬすくせにてひかくしきおやもおよひ

奈起心越徒可不尔也安利希武佐留尔天八閑志  
なき心をつかふにやありけむさるにてはかし

古幾春知尔毛奈類部幾人農安也志起世可以  
こきすちにもなるへき人のあやしきせかい

【落標】 20

尔天武末礼多良武八以止遠之宇可多志計奈久毛  
にてむまれたらむはいとをしうかたしけなくも

安流部幾可那古乃保止春久之天武可遍天无止  
あるへきかなこのほとすくしてむかへてんと

於保之天日武可之乃院以曾幾徒久良寸部幾与之  
おほしてひむかしの院いそきつくらすへきよし

毛与本之於保世給不佐留所尔者可く志起人之  
もよほしおほせ給ふさる所にはかくしき人し

裳安利可多閑良武遠於保之天己院尔佐不良比  
もありかたからむをおほしてこ院にさふらひ

之世武之乃武春女宮内卿乃宰相尔天奈久  
しせむしのむすめ宮内卿の宰相にてなく

奈利尔之人乃己奈利之遠者、奈止毛宇世天可春  
なりにし人のこなりしをは、なともうせてかす

可奈留世耳遍尔計留可波可奈幾佐滿尔天己  
かなる世にへにけるかはかなきさまにてこ

宇三多利止幾古之女之徒希多流遠志留太  
うみたりときこしめしつけたるをしるた

【濹標】 21

与利安利天已止乃徒以天丹末祢比幾古衣希留  
よりありてことについでにまねひきこえける

人女之天左流部幾左満尔乃多末比知幾留満多  
人めしてさるへきさまにのたまひちきるまた

和可久奈仁心毛奈起人丹天安希久礼人志礼奴安八  
わかくなに心もなき人にてあけくれ人しれぬあは

良也丹奈可武留心保曾左奈礼八婦可宇毛思太止  
らやになかむる心ほそさなればふかうも思たと

良寸己乃御安多利乃己止越比止部尔女天多宇思  
らすこの御あたりのことをひとへにめてたう思

幾古衣天末以留部幾与之申左世多利以止安八礼  
きこえてまいるへきよし申させたりいとあはれ

丹可徒盤於保之天以多之多天給不毛乃、徒以天  
にかつはおほしていたして給ふものゝついで

耳以三志宇志乃比満幾礼天於八之満以多利佐  
にいみしういのひまきれておほしまいたりさ

八起已衣奈可良以可丹世末之止思美多礼希留遠  
はきこえなからいかにせましと思みたれけるを

【濹標】 22

以止可多之希奈起尔与呂徒思奈久左女天多、  
いとかたしけなきによろつ思なくさめてたゝ

乃多末波世武満、丹止幾己由与呂之幾日奈利  
のたまはせむまゝにときこゆよろしき日なり

希礼八以曾可之多天給比天安也志宇思屋利  
ければいそかして給ひてあやしう思やり

奈起屋宇奈礼止思不佐満古止奈留事丹天奈武  
なきやうなれと思ふさまことなる事にてなむ

身徒可良毛於保衣奴春末井丹武春保、礼太  
みつからもおほえぬすまゐにむすほゝれた

里之多女之越思与曾部天志八之祢无之給部奈  
りしためしを思よそへてしはしねんし給へな

止己止乃安利屋宇久八志宇可多良比給不宇遍能  
とことのありやうくはしうかたらひ給ふうへの

宮徒可部時々世志可八美多満不於利毛安利志越以  
宮つかへ時々せしかはみたまふおりもありしをい

多宇遠止呂部尔希利以恵乃左満毛以比志良寿安  
たうをとろへにけりいゑのさまもいひしらすあ

【落標】 23

礼満止比天左寸可尔於保幾奈留所乃已多知奈  
れまとひてさすかにおほきなる所のこたちな

止宇登満之希丹以可天春久之徒良武止美遊人乃  
とうとましけにいかてすくしつらむとみゆ人の

左満王可也可丹於可之希礼八御良无之者那多礼春止  
さまわかやかにおかしければ御らんしはなたれすと

閑久太八布礼給天止利可遍之徒部幾心知己曾  
かくたはふれ給てとりかへしつへき心ちこそ

春礼以可丹止乃給不尔徒希天毛希丹於奈之宇  
すれいかにとの給ふにつけてもけにおなしう

八御身知可宇毛徒可宇満徒利奈礼八字起身毛奈久  
は御身ちかうもつかうまつりなれはうき身もなく

佐三那末之止美多天末川類  
さみなましとみたてまつる

閑年天与利遍多天怒中登奈羅者  
かねてよりへたてぬ中とならば

祢止王可礼八於之幾物耳曾安利希留志多比也志  
ねとわかればおしき物にそありけるしたひやし

【落標】 24

奈末之止乃多末部者宇知和良比部  
なましとのたまへはうちわらひて

宇知徒希能王可礼遠、志武可古登耳天  
うちつけのわかれを、しむかことにて

於毛八武可多仁志多比也八世奴奈礼天幾己由留  
おもはむかたにしたひやはせぬなれてきこゆる

遠以多之止於保春久流満尔天曾京乃保止盤  
をいたしとおほすくるまにてそ京のほとは

由起者奈礼希流以止志多之幾人佐之曾部給天  
ゆきはなれけるいとしたしき人さしそへ給て

遊女仁毛良寸満之具久知可多女給天徒可八春  
ゆめにもらすましくくちかため給てつかはす

御者閑之左留部幾毛乃奈止所世起満天思保之  
御はかしさるへきものなど所せきまておほし

也良怒久満奈之女乃止尔毛安利可多宇古満也  
やらぬくまなしめのとにもありかたうこまや

可奈留御以多者利乃本止安左可良寸入道農思  
かなる御いたはりのほとあさからす入道の思

【濔標】 25

閑之徒幾思良无安利左滿思屋留毛保、恵末礼  
かしつき思らんありさま思やるもほゝゑまれ

太末不已止於本具又安八礼丹心久流之宇毛多、  
たまふことおほく又あはれに心くるしうもたゝ

古乃事能御心尔閑、流毛安左可良奴丹已曾八御婦  
この事の御心にかゝるもあさからぬにこそは御ふ

三耳毛遠呂可尔毛天奈之思滿之止可部春く、以  
みにもをろかにもてなし思ましとかへすく、い

末之女給部利  
ましめ給へり

以徒之可毛袖宇知可希武於止女古可  
いつしかも袖うちかけむおとめこか

世越遍天奈川留以者乃於比左起徒乃久丹滿  
世をへてなつるいはのおひさきつのくにま

天八舟尔天曾礼与利安奈多八武滿丹天以曾起徒  
ては舟にてそれよりあなたはむまにていそきつ

幾奴入道未知止利与呂已比閑之古末利幾  
きぬ入道まちとりよろこひかしこまりき

【濔標】 26

古由類己止可幾利那之曾奈多仁武幾天於可三幾  
こゆることかきりなしそなたにむきておかみき

己衣天安利可多起御心者衣遠思尔以与く、以多八志宇  
こえてありかたき御心はえを思にいよくいたはしう

於曾呂之幾滿天思不知己乃以止由、志幾滿天  
おそろしきまで思ふちこのいとゆゝしきまで

宇川久志宇於八春流事多久比奈之希仁可之已起  
うつくしうおはする事たくひなしけにかしこき

御心尔閑之川幾幾古衣无止於保之多留八武部奈利  
御心にかしつきこえんとおほしたるはむへなり

希利止美多天末川留耳安也志起美知尔以天  
けりとみたてまつるにあやしきみちにて

多知天夢能心知志徒留奈計幾毛佐女耳  
たちて夢の心ちしつるなげきもさめに

氣利以止宇徒久志宇良宇太宇於保衣天安川可比  
けりいとうつくしうらうたうおほえてあつかひ

幾古由己毛知能君毛月己呂物越乃三思之  
きこゆこもちの君も月ころ物をのみ思し

【落標】 27

徒三天以止、与八流心知尔以幾太良武止毛於保  
つみていと、よはる心ちにいきたらむともおほ

衣左利徒留遠己乃御遠起天乃春己之物思奈久  
えざりつるをこの御をきてのすし物思なく

佐女良類、仁曾閑之良毛多希天御徒可比尔毛  
さめらるゝにそかしらもたけて御つかひにも

尔奈起左滿乃心左之遠徒久春止久滿以利奈武止  
になきさまの心さしをつくすとくまいりなむと

以曾起久留之閑礼者思不事止毛春古之幾古  
いそきくるしかれば思ふ事ともすこしきこ

衣天  
えて

比止利之天奈川流八袖乃保止奈起耳  
ひとりしてなつるは袖のほとなきに

於保不者可利乃可希越之曾末徒止聞衣多利  
おほふはかりのかけをしそまつと聞えたり

安也志起末天御心尔閑、利由可志宇於保左留女  
あやしきまで御心にかゝりゆかしうおほさる女

【落標】 28

君耳八己止丹安良八之天遠左く幾古衣給八奴遠  
君にはことにあらはしてをさくきこえ給はぬを

幾、安八世給事毛己曾止於保之帝佐己曾安奈  
き、あはせ給事もこそとおほしてさこそあな

連安也志宇祢知計多流和左奈利良左毛於  
れあやしうねしけたるわさなりやさもお

八勢奈武止思不安多利尔八心毛止奈久天思能保  
はせなむと思ふあたりには心もとなくて思のほ

可耳久知於之真奈武女尔天安那連八以止己曾  
かにくちおしくなむ女にてあなれはいとこそ

毛乃之介礼多川祢志良天毛安利奴部幾事奈礼  
ものしくれたつねしらでもありぬへき事なれ

止左八衣思春川末之幾和左奈利希利与比尔  
とさはえ思すつましきわさなりけりよひに

屋利天美世多天末川良武仁久三給不奈与止幾  
やりてみせたてまつらむにくみ給ふなよとき

古衣給部八於毛天宇知安可三天安也志宇徒祢尔  
こえ給へはおもてうちあかみてあやしうつねに



【濔標】 29

可也宇奈流春知能太未比徒久流心乃保止己曾  
かやうなるすちのたまひつくる心のほとこそ

我奈可良宇止末之希礼毛乃尔久三八以徒奈良婦部  
我なからうとましけれものにくみはいつならふへ

幾仁可止惠无之給部八以止与具宇知惠三天曾与  
きにかとゑんし給へいとよくうちゑみてそよ

太可奈良八之仁可安良武於毛八寸尔曾美衣給不也  
たかならはしにかあらむおもはずにそみえ給ふや

人乃心与利保可奈留思屋利古止之天物惠无之奈  
人の心よりほかなる思やりことして物ゑんしな

止志給不也思部八可奈之止天者天く盤奈美多  
とし給ふよ思へはかなしとてはてくはなみた

久三給不止之己呂安可寸恋之止思幾古衣給之  
くみ給ふとしころあかす恋しと思きこえ給し

御心乃宇知止毛於利く乃御婦三能可与比奈止於  
御心のうちともおりくの御ふみのかよひなとお

保之以徒留尔八与呂徒農事春左比尔己曾安  
ほしいつるにはよろずの事すさひにこそあ

【濔標】 30

礼止思希多礼給不古乃人遠可宇末天思屋利古  
れと思けたれ給ふこの人をかうまで思やりこ

登止婦八猶思不屋宇能侍曾末多起尔幾古盈  
ととふは猶思ふやうの侍そまたきにきこえ

八又比可心衣太未遍希礼八止乃多末比佐之天  
は又ひか心えたまふへければどのたまひさして

人可良能於可之閑利志毛所可良尔也女川良之宇  
人からのおかしかりしも所からにやめすらしう

於保衣幾可之奈止可多利幾古衣給安八礼奈利之  
おほえきかしなとかたりきこえ給あはれなりし

遊不部乃希不利以比之己止奈登末本奈良祢止  
ゆふへのけふりいひしことなとまほならねと

曾乃与能閑多知保乃美之古止乃称農奈滿  
そのよのかたちほのみしことのねのなま

女起多利之毛春部天御心止末礼留左滿尔乃多  
めきたりしもすへて御心とまれるさまにのた

末比以徒留尔毛我八又奈久己曾可那之止思奈計可礼  
まひいつるにも我は又なくこそかなしと思なけかれ

【落標】 31

之可春左比爾天毛心越王計給希武与止多、  
しかすさひにても心をわけ給けむよとた、

奈良寸思徒、希天我者王礼止字知曾武幾奈可女  
ならず思つゝけて我はわれとうちそむきなかめ

天安八礼奈利之与能安利左満可那止比止利己止乃  
てあはれなりしよのありさまかなとひとりこと

也宇知奈計幾天  
やうちなげきて

思不止知奈比久可多仁者奈良寿止毛我曾  
思ふとちなひくかたにはあらずとも我そ

煙耳左起多知那末之奈丹止可心宇也  
煙にさきたちなましなにか心うや

多礼丹与利世越字見山耳由起女久利  
たれにより世をうみ山にゆきめぐり

多衣奴涙尔宇起之川武身曾以天也以可天可美衣  
たえぬ涙にうきしすむ身そいてやいかてかみえ

多天末川良无以乃知己曾可奈比閑多可遍以毛能  
たてまつらんのちこそかなひかたかへいもの

【落標】 32

奈女礼者可奈起事丹天人丹心遠可礼之登思不  
なめれはかなき事にて人に心をかれしと思ふ

毛多、比止川由部曾也止天佐字乃御古止比起与世  
もたゝひとつゆへそやとてさうの御ことひきよせ

天可起安八世春左比給天曾、乃可之幾古衣給部登  
てかきあはせささひ給てそゝのかしきこえ給へと

可能春久礼多利希武毛祢多起尔也天毛布礼給  
かのすくれたりけむもねたきにやてもふれ給

八春以止於保止可丹宇川久之宇多越也起多満部類  
はすいとおほとかにうつくしうたをやきたまへと

毛乃可良左寸可仁志不祢幾所徒幾天毛乃恵无  
ものからさすかにしふねき所つきてものゑん

之志多満部留可中く安以行徒幾天者良太  
ししたまへるか中くあい行つきてはらた

知奈之給遠於可之宇美所安利止於保春五月五日  
ちなし給をおかしうみ所ありとおほす五月五日

丹以可丹安多留良武止人志礼春可春部給天由可志宇  
にいかにあたるらむと人しれすかすへ給てゆかしう

【濔標】 33

安八礼丹於保之屋留奈尔事毛以可丹可比安留左滿  
あはれにおほしやるなに事もいかにかひあるさま

丹毛天奈之宇礼之可良滿之久知於之能王左也  
にもてなしうれしからましくおしのわざや

左流所尔志毛心久類之幾左滿尔天以天幾太  
さる所にしも心くるしきさまにてきた

類止於保春於止己君奈良滿之可八加宇志毛御心  
とおほすおとこ君ならましかはかうしも御心

丹可希給末之幾越可多之計奈宇以止於之宇王  
にかけ給ましきをかたしけなういとおしうわ

可御春久世毛古乃御事丹徒希天曾可太本奈利  
か御すく世もこの御事につけてそかたほなり

希利止於保左留、御徒可比以多之多天給不可  
けりとおほさるゝ御つかひいたしたて給ふか

奈良寸曾乃比太可部春滿可利川計止乃多末部八  
ならずそのひたかへすまかりつげとのたまへは

五日以幾川幾奴於保之屋留事毛安利可多宇  
五日いきつきぬおほしやる事もありかたう

【濔標】 34

女天多起左滿尔天末女く志幾御止不良比毛  
めてたきさまにてまめくしき御とふらひも

安利  
あり

宇見松也止起曾登毛奈幾可氣耳  
うみ松やときそともなきかけに

為天奈尔乃安也女毛以可、和久良武心乃安久可  
ぬてなにのあやめもいかゝわくらむ心のあくか

類、末天奈武猶可久天八衣寸久須末之幾越  
るゝまてなむ猶かくてはえすくすましきを

思多知給比祢左利止毛宇之呂女多起事八  
思たち給ひねざりともうしろめたき事は

与毛止可以給部利入道連以乃与呂己比奈起之天  
よもとかい給へり入道れいのよろこひなきして

為多利加、流於利八以希留可比毛徒久利以天多流  
ぬたりかゝるおりはいけるかひもつくりいてたる

古止八利奈利止美遊古、丹毛与呂徒止己呂世起  
ことほりなりとみゆこゝにもよろつところせき

【落標】 35

末天思末宇希多利氣礼止己乃御徒可比奈久八  
まて思まうけたりけれとこの御つかひなくは

屋三乃夜尔天己曾久礼奴遍可利希礼女能止毛己乃  
やみの夜にてこそくれぬへかりけれめのともこの

女君能安八礼耳思也宇奈留遠可多良比人尔天世  
女君のあはれに思やうなるをかたらひ人にて世

乃奈久左女尔志氣利遠左く於止良奴人毛類以尔  
のなくさめにしけりをさくおとらぬ人もるいに

布礼天武可部止利天安良春礼止古与那久遠止  
ふれてむかへとりてあらずれとよなくをと

呂衣多流美也徒可遍人奈止能以者本乃中多川  
ろえたるみやつかへ人などのいはほの中たつ

奴留可於知止末礼留奈止己曾安連己礼八古与那  
ぬるかおちとまれるなどこそあれこれはこよな

宇己女起思安可礼利幾、所安流世乃物可多利  
うこめき思あかれりき、所ある世の物かたり

奈止之天於止、能君乃御安利左満世丹可之徒可礼  
なとしておと、の君の御ありさま世にかしつかれ

【落標】 36

給部留御於保衣乃本止毛女心知尔満可勢天可起利  
給へる御おほえのほとも女心ちにまかせてかきり

奈久可多利徒久世八与仁閑久於本之以徒波可利能  
なくかたりつくせはよにかくおほしいつはかりの

奈己礼止、女多流身毛以止多計久也宇く於毛比  
なこりと、めたる身もいとたけくやうくおもひ

奈利希利御布三毛呂止毛丹美天心能字知仁安八  
なりけり御ふみもろともみて心のうちにあは

連可宇己曾思乃保可耳女天多起春久世八安利介礼  
れかうこそ思のほかにめてたきすくせはありけれ

宇起物八王可身耳己曾安利希礼止思徒、氣良  
うき物はわか身にこそありけれと思つ、けら

礼止女乃止能事八以可丹奈止己満可耳止不良八世  
れとめのとの事はいかになとこまかにとふらはせ

給部留毛可多之希奈久奈尔事毛奈久左女希利  
給へるもかたしけなくに事もなくさめけり

御返耳八  
御返には、

【濔標】 37

可寸奈良怒美之滿可久礼耳奈久多川  
かすならぬみしまかくれになくたつ

遠氣不毛以可尔止、婦人曾奈起与呂徒尔思不給  
をけふもいかにと、ふ人そなきよろつに思う給

部武春本保留、安利左滿遠可久多滿左可能御奈久  
へむすほほる、ありさまをかくたまさかの御なく

左女耳可希侍以乃知農保止毛者可奈久奈武希  
さめにかけて侍いのちのほともはかなくなむけ

耳宇之路也春久於毛不給部遠久和左毛可那止  
にうしろやすくおもふ給へをくわさもかなと

末女也可尔幾古衣多利宇知可遍之美給徒、  
まめやかにきこえたりうちかへしみ給つ、

安八礼止奈可也可耳比止利古知太末不遠女君  
あはれとなかやかにひとりこちたまふを女君

志利女仁美於己勢天宇良与利遠知丹古久舟能  
しりめにみおこせてうらよりをちにくく舟の

止志乃比也可耳比止利己地奈可女給不遠滿己古  
としのひやかにひとりこちなかめ給ふをまここ

【濔標】 38

止八閑久末天止利奈之給不与己八多、可八可利  
とはかくまでとりなし給ふよこはた、かはかり

乃安八礼曾也止己呂能左滿奈止宇知思也流時く  
のあはれそやところのさまなとうち思やる時く

幾之可多乃事春礼可多起比止利己止越与宇  
きしかたの事わすれかたきひとりことをよう

己曾春久以給八祢奈止宇良美幾古衣給天宇八徒、  
こそすくい給はねなとうらみきこえ給てうはつ、

美者可利遠三世多天末川良世給不天奈止能以止由部  
みはかりをみせてまつらせ給ふてなどのいとゆへ

徒幾天也武己止奈起人久流之希奈留越可、礼八奈  
つきてやむことなき人くるしけなるをか、れはな

女礼止於保春閑久己乃御心止利給本止尔者那  
めりとおほすかくこの御心とり給ほとにはな

知留里遠可礼者天給比奴留己曾以止於之希礼於  
ちる里をかれはて給ひぬるこそいとおしけれお

保也希事毛志希久止己呂世起御身尔於保  
ほやけ事もしけくところせき御身におほ

【落標】 39

之者、加流尔曾部天毛川良之具御女於止呂  
しはゝかるにそへてもめすらしく御めおとろ

具己止乃奈起保止思志徒女給奈女利左美多礼  
くことのなきほと思しつめ給なめりさみたれ

川連く奈留己呂於保也希和多之毛能志徒可  
つれくなるころおほやけわたしものしつか

奈留尔於保之於己之天和多利給部利与曾那可良  
なるにおほしおこしてわたり給へりよそなから

蒙安氣久礼耳徒希天与呂川尔於保之也利  
もあけくれにつけてよろつにおほしやり

止不良比幾古衣給遠太乃三尔天春久以太末不所  
とふらひきこえ給をたのみにてすくいたまふ所

奈礼者以満女可之宇古、呂尔久幾左満尔曾八三  
なれはいまめかしうこゝろにくきさまにそはみ

宇良見給部幾奈良称八心也春許奈利年比尔以  
うらみ給へきならねは心やすけなり年比にい

与く安連満左利春己希尔天於八寸女御能君尔  
よくあれまさりすこけにておほす女御の君に

【落標】 40

御物可多利幾古衣給天西乃徒末止尔夜布可之天  
御物かたりきこえ給て西のつまとに夜ふかして

多知与利給部留月御保呂丹佐之入天以止、衣  
たちより給へる月おほろにさし入ていとゝえ

武奈留御布流末比徒幾毛世寸美衣給不以止  
むなる御ふるまひつきもせずみえ給ふいと

徒、満之希礼止波之知可宇宇知奈可女給希留左満  
つ、ましけれとはしちかうちななめ給けるさま

奈可良乃止也可丹天毛乃之給不希八比以止女也春  
なからのとやかにてものし給ふけはひいとめやす

之久比奈乃以止知己宇奈起多留越  
しくひなのいとちこうなきたるを

久比那多耳於止呂可左寸盤以可尔之  
くひなたにおとろかさすはいかにし

帝安連多留屋止尔月越以礼末之以止奈川可之  
であれたるやとに月をいれまいとなつかし

宇以比希知給部留曾止利く丹春天可多起与可那  
ういひけち給へるそとりくにしてかたきよかな

加、流己曾中く身毛久類之希礼止於保春  
かゝるこそ中く身もくるしけれどおほす

遠之奈遍天多、具久比奈耳於止呂  
をしなへてたゞくくひなにおとろ

可者宇八乃空奈留月毛己曾以礼宇之呂女多宇止  
かはうはの空なる月もこそいれうしろめたうと

八幾古衣給部止安多く志起春知奈止宇多可八之幾  
はきこえ給へとあたくしきすちなとうたかはしき

御心者部尔八安良寿年比満知春久之幾古衣給部  
御心はへにはあらず年比まちすくしきこえ給へ

類毛佐良丹於呂可丹八於本左礼左利介利曾良奈  
るもさらにおろかにはおほされさりけりそらな

奈可女曾止太乃女幾古盈給比之於利能事  
なかめそとたのめきこえ給ひしおりの事

毛乃多末比以天、奈止天多久比安良之登以三  
ものたまひいて、なとてたくひあらしといみ

志宇毛能越思志徒三希武宇起身可良八於奈之奈計  
しうものを思しつみけむうき身からはおなしなけ

可之左仁己曾止乃多末部留毛於以良可仁良宇多計  
かしさにこそとのたまへるもおいらかにらうたけ

奈利連以乃以徒己乃御己止乃者尔可安良武徒幾世  
なりれいのいつこの御ことのはにかあらむつきせ

寿曾可多良比奈久左女幾古衣給可也字能徒以天  
すそかたらひなくさめきこえ給かやうのついで

尔毛可乃五世知越於保之王春礼須又美天之可  
にもかの五せちをおほしわすれす又みてしか

那止心耳可計給部連止以止可多起古止丹天衣未起  
なと心にかけ給へれといとかたきことにてえまき

礼給八寸女毛乃思比多衣奴遠、也八与呂徒尔於毛  
れ給はず女もの思ひたえぬを、やはよろつにおも

比以婦事毛安礼止与仁遍无己止越思堂部多利  
ひいふ事もあれとよにへんことを思たえたり

心也春起止乃徒久利之天八可也宇能人徒止部天毛  
心やすきとのつくりしてはかやうの人つとへても

之思左满尔可之徒幾給部幾人毛以天毛能之給  
し思さまにかしつき給へき人もいてものし給

【濬標】 43

八、左流入乃宇之呂三尔毛登於保春可能院乃徒は、さる人のうしろみにもとおほすかの院のつ

久利左満中く見止己呂於保具以満女以多利与之くりさま中く見どころおほくいまめいたりよし

安留春良宇奈止越盈利天安帝く尔毛与越之あるすらうなどをえりてあてくにもよをし

給不奈以之乃可武乃君遠奈越衣思者奈知幾古衣給ふないしのかむの君をなをえ思はなちきこえ

多満八春古利春満尔多知可部利御心者部毛安礼たまはずこりすまにたちかへり御心はへもあれ

止女八字幾尔古利給天武可之乃也尔毛安比志良部と女はうきにこり給てむかしのやうにもあひしらへ

幾古衣給八寸中く止己呂世宇佐宇く志宇世中きこえ給はず中くところせうさうくしう世中

於保左留院八乃止也可耳於保之奈利天時く尔止おほさる院はのとやかにおほしなりて時くにつ

希天於可之幾御安曾比奈止古乃満志計尔天於八之けておかしき御あそひなこのましけにておはし

【濬標】 44

未寸女御可字以美那連以乃己止左不良比給部登ます女御かういみなれいのことさふらひ給へと

春宮能御者、女御乃三曾止利多天、時女起給己止春宮の御は、女御のみそとりたて、時めき給こと

毛那久可武乃君能御於保衣丹遠之気多礼多満もなくかむの君の御おほえにをしけたれたま

部利之遠閑久比幾可遍女天多起御左以者比尔へりしをかくひきかへめてたき御さいはひに

天八奈礼以帝、宮耳曾比多天末川利給部留古てはなれいて、宮にそひたてまつり給へるこ

乃於止、乃御止乃并止己呂八昔乃志計以左奈利のおと、の御とのゐところは昔のしけいさなり

奈之川本丹春宮八於八之満世八知可止奈利能御心なしつばに春宮はおはしませはちかとなりの御心

与勢尔奈耳事毛幾古盈可与比天宮遠毛宇よせになに事もきこえかよひて宮をもう

之呂三天末川利給入道后宮御久良并遠末多しろみたてまつり給人道后宮御くらゐをまた



【濔標】 45

安良多女給部幾奈良称者太政天皇尔奈寸良部天  
あらため給へきならねは太政天皇になすらへて

見不<sub>レ</sub>太満以良勢給院司止毛奈利天左満己止尔  
みふたまいらせ給院司ともなりてさまことに

以徒久之御遠古奈比具止久乃事越川祢能御以止奈  
いつくし御をこなひくとくの事をつねの御いとな

三丹天於八之末寸登之己呂世尔波、可利天以  
みにておはしますとしころ世には、かりてい

天以利毛可多久美多天末川利給八奴奈計幾越  
ていりもかたくみたてまつり給はぬなげきを

以婦世久於保之希留尔於本春左満尔天末以利  
いふせくおほしけるにおほすさまにてまいり

満可天給毛以止女天太希礼者於保幾左起八字幾  
まかて給もいとめてたければおほきさきはうき

毛能八世奈利希利止於保之奈計久於止、八己止尔  
ものは世なりけりとおほしなげくおと、はことに

布礼天以止者徒可之氣尔徒可末川利心与世幾  
ふれていとはつかしけにつかまつり心よせき

【濔標】 46

古衣給毛中く、以止於之希奈留越世人毛也春可良  
こえ給も中く、いとおしけなるを世人もやすから

寿幾古衣希利兵部卿乃美己登之己呂能御心者  
すきこえけり兵部卿のみことしころの御心は

部能徒良具於毛八寸尔天多、世乃幾己衣之遠乃三  
へのつらくおもはずにてた、世のきこえしをのみ

於保之者、加利給之己止越於止、八字起毛能尔  
おほしは、かり給しことをおと、はうきものに

於本之遠幾天武可之乃也宇尔毛武徒比幾古衣給  
おほしをきてむかしのやうにもむつひきこえ給

八寸奈部天乃世耳八安満祢久女天多起御心奈礼  
はずなへての世にはあまねくめてたき御心なれ

止古乃御安多利八中く、奈左計奈起婦之毛宇地満  
とこの御あたりは中く、なざけなきふしもうちま

勢給遠入道乃宮八以止於之宇本以奈起事仁天美多天  
せ給を入道の宮はいとおしう本いなき事にてみたて

末川利給部利世乃中能古止多、奈可者越王計天於  
まつり給へり世の中のことた、なかはをわけてお

【落標】 47

保幾於止、古乃於止、能御滿、奈利權中納言能御  
はきおと、このおと、の御ま、なり權中納言の御

武春女曾能止之乃八月尔末以良世給於保知於  
むすめそのとしの八月にまいらせ給おほちお

止、為多知天幾之起奈止以止安良滿本之兵部卿宮  
と、みたちてきしきなといとあらまほし兵部卿宮

能奈可農君毛左也宇丹心佐之天可之徒幾給名太  
のなかの君もさやうに心さしてかしつき給名た

可幾越於止、八人与利滿左利給部止之毛於保左寸  
かきをおと、は人よりまさり給へとしもおほさず

奈武安利希留以可、志多滿八武止春良無曾能秋春  
なむありけるいか、したまはむとすらむその秋す

美与之丹末宇天給願止毛者多之給部希礼八以可女之  
みよしにまうて給願ともはたし給へければいかめし

幾御安利幾尔天世中由春利天可武多知女殿  
き御ありきにて世中ゆすりてかむたちめ殿

上人我毛く、止徒可宇末川利給於利之毛閑能安可之  
上人我もく、とつかうまつり給おりしもかのあかし

【落標】 48

乃人止之己止能連以農事尔天徒可宇末川留越  
の人としことのれいの事にてつかうまつるを

己曾古止之八佐八留事安利天於己多利希留遠  
こそことしはさはる事ありておこたりけるを

閑之己末利止利可左年天思多知介利舟尔天  
かしこまりとりかさねて思たちけり舟にて

滿宇天多利幾之仁左之徒久流程見礼者乃、  
まうてたりきしにさしつくる程見ればの、

志利天末宇天給不人能希八比奈起左尔美知天  
しりてまうて給ふ人のけはひなきさにみちて

以徒久志幾可武太可良遠毛天徒、希多利加久人  
いつくしきかむたからをもてつ、けたりかく人

止遠川良奈止佐宇曾久越止、能部可多知越盈良  
とをつらなとさうそくを、のへかたちをえら

比多利太可滿宇天給部留曾止登不女礼者内大臣  
ひたりたかまうて給へるそとふめれば内大臣

殿乃御願者多之仁末宇天給不遠志良奴人毛安利  
殿の御願はたしにまうて給ふをしらぬ人もあり

【濔標】 49

希利止天者可奈起保止乃希寸多仁心知与計  
けりとはかなきほととのけすたに心ちよけ

耳宇知者良婦氣尔安左末之宇月日蒙  
にうちはらふけにあさましう月日も

己曾安連中く古能御安利左満遠波留可丹見奉  
こそあれ中くこの御ありさまをはるかに見奉

毛身能保止久知於之字於保遊左寸可尔可計  
も身のほとくちおしうおほゆさすかにか

者奈連多天末川良奴春久勢奈可良加久具地  
はなれたてまつらぬすくせなからかくくち

於之幾く八能物多仁毛乃思奈計丹天徒可宇末川  
おしきくはの物たにも思なけにてつかうまつ

類遠以呂婦之耳思日多流尔奈仁乃徒三婦可  
るをいろふしに思ひたるになにのつみふか

幾身尔天心耳可希天於保徒可奈宇思幾古  
き身にて心にかけておほつかなう思きこ

衣徒く加く利希流御比く幾遠毛志良天多知以天  
えつくかりける御ひくきをもしらてちちいで

【濔標】 50

徒良武奈止思徒く久流耳以止可那志宇天人志礼  
つらむなと思つくるにいとかなしうて人しれ

春志本多礼希利松原能布可美止利奈留中仁  
すしほたれけり松原のふかみとりなる中に

花紅葉遠己起知良之多流止見由留宇遍農  
花紅葉をこきちらしたると見ゆるうへの

幾奴能古起宇春幾加寸志良寿六位乃中尔毛  
きぬのこきうすきかずしらす六位の中にも

藏人盤安越以呂志類久美衣天可能閑毛乃美  
藏人はあをいろしるくみえてかのかものみ

徒可幾宇良美之右近乃尉毛由希以尔奈利天  
つかきうらみし右近の尉もゆけいになりて

古止く志希奈留隨身久之多流藏人奈利与  
ことくしけなる隨身くしたる藏人なりよ

之清毛於奈之春計丹天人与利己止尔毛能思  
し清もおなしすけにて人よりことにも思

奈幾氣之幾仁天於止呂く志幾阿可幾奴春  
なきけしきにておとろくしきあかきぬす

【落標】 51

可多以止幾与計奈利春遍天見之人々比幾  
かたいときよけなりすへて見し人々ひき

加遍者那也可尔奈仁事思良无止美衣天宇知  
かへはなやかにに事思らんとみえてうち

地利多留尔王可也可奈留閑武多知女殿上人乃  
ちりたるにわかやかなるかむたちめ殿上人の

我毛く止思以止美武滿久良奈止末天可左利越  
我もくと思いとみむまくらなとまでかさりを

止乃遍美可幾給部留八以美之幾見毛乃尔并  
とへのみかき給へるはいみしき見ものにぬ

奈可人毛思部利御車遠者流可尔美也連八奈  
なか人も思へり御車をはるかにみやればな

加く心也滿之具天恋之幾御可希遠毛衣見太  
かく心やましくて恋しき御かけをもえ見た

天末川良寿可八良能於止乃連以遠末祢比天  
てまつらすかはらのおとへのれいをまねひて

和良八春以志无遠給八利給希留以止於可之氣尔  
わらはすいしんを給はり給けるいとおかしけに

【落標】 52

佐宇曾起見徒良由比天武良左起春曾已農  
さうそきみつらゆひてむらさきすそのの

毛登由比奈滿女可之宇多許春可多止乃比宇  
もとゆひなまめかしうたけすかたとへのひう

徒久志希尔天十人左滿己止尔以滿女可之宇美  
つくしけにて十人さまことにいまめかしうみ

遊於保止乃者良能王可君可幾利那久可之徒幾  
ゆおほとのはらのわか君かきりなくかしつき

多天武滿曾比和良八乃本止美奈徒久利安八世  
たてむまそむわらはのほとみなつくりあはせ

天也宇可遍天佐宇曾起王計多利雲井者留  
てやうかへてさうそきわたり雲井はる

可尔女天多久美遊留耳徒希天毛和可君能可寸  
かにめてたくみゆるにつけてもわか君のかす

奈良奴左滿尔天毛能之給遠以美之止思以与く  
ならぬさまにてもし給をいみしと思いよく

美也志呂農可多越於可三幾古由尔乃可三滿  
みやしろのかたをおかみきこゆくにかみま

【濔標】 53

以利天御末宇計連以乃大臣奈止能滿以礼給与利  
いりて御まうけらしいの大臣などのまいる給より

八己止尔仁奈久徒可宇末川利希武可之以止波之  
はことになくつかうまつりけむかしいとはし

太那氣礼者多知滿之里可寸奈良奴身能以  
たなければたましりかすならぬ身のい

左、可乃事世武尔神毛見以礼可寸末部給部  
さ、かの事せむに神も見いれかすまへ給へ

幾尔毛安良春可部良武尔毛中曾良奈利希不八  
きにもあらずかへらむにも中そらなりけふは

奈尔者仁舟佐之止女天者良部遠多仁世无止天  
なにはに舟さしとめてはらへをたにせんとて

古起和多利奴君八夢尔毛志利給八寸夜日止  
こきわたりぬ君は夢にもしり給はず夜ひと

与色く、能己止越世左勢給滿己止尔神能与呂  
よ色く、のこをせさせ給まことに神のよろ

古比給部幾己止遠志徒久之天幾之可多能御願  
こひ給へきことをしつくしてきしかたの御願

【濔標】 54

尔毛宇知曾部安利可多起末天安曾比乃、志利安  
にもうちそへありかたきまであそひの、しりあ

可之給惟光也宇能人八心能宇知尔神乃御止久越  
かし給惟光やうの人は心のうちに神の御とくを

安八礼尔女天多之止思安可良左滿尔多知以天給  
あはれにめてたしと思あからさまにたちいて給

部流所尔左不良比帝幾古衣以天多利  
へる所にさふらひてきこえてたり

春見与之能末川己曾物盤可那之介礼神  
すみよしのまつこそ物はかなしけれ神

与能己止越可希天思部八氣尔止於保之以天、  
よのこをかけて思へはけにとおほしいて、

安良可利之浪乃滿与比尔住吉乃神遠  
あちかりし波のまよひに住吉の神を

者可希天王春礼也八春類志留之安利奈止能多  
はかけてわすれやはするしるしありなとのた

末不毛以止女天多之可能安可之能舟古乃比、幾仁  
まふもいとめてたしかのあかしの舟このひ、きに

【落標】 55

於左礼天春起奴留事毛幾已由連者志良左利  
おされてすきぬる事もきこゆれはしらすり

希類与止安八礼尔於保春神乃志留部遠於保之  
けるよとあはれにおほす神のしるへをおほし

以徒留毛遠呂可奈良称者以左、可奈留世宇曾己  
いつるもをろかならねはいさゝかなるせうそこ

遠多仁志天心奈久佐女波也中く丹思良無可之  
をたにして心なくさめはや中くに思らむかし

止於保春美也志呂多知太末天所く丹世宇衣宇  
とおほすみやしろたちたまで所くにせうえう

遠徒久之給不奈尔者乃御波良部奈、勢仁与曾  
をつくし給ふなにはの御はらへな、せによそ

遠之宇徒可末川留本利衣乃和多利遠御良无之天  
をしようつかまつるほりえのわたりを御らんして

以末波太於奈之奈尔者奈流止御心尔毛安良天宇  
いまはたおなしなにはなると御心にもあちてう

知春之給部留遠御車乃毛止知可起惟光宇計給  
ちすし給へるを御車のもちかき惟光うけ給

【落標】 56

者利也志徒良武左流女之毛也止連以尔奈良比  
はりやしつらむさるめしもやとれいにならひ

天婦止己呂丹満宇計多流徒可美之可起布天  
てふところにまうけたるつかみしかきふて

奈止御車止、武留所尔天多末川連利於可  
なと御車と、むる所にてたてまつれりおか

之止於保之天堂、宇加見耳  
しとおほしてた、うかみに

美越徒久之古不留志類之耳古、末天毛女  
みをつくしこふるしるしにこ、まてもめ

久利安比希留衣尔八布可之那止天給部連八可  
くりあひけるえにはふかしなとて給へればか

之古乃心志礼流志毛人之天屋利希流古満奈  
しこの心しれるしも人してやりけるこまな

女天宇知春起給不尔毛心乃三字古久仁徒由者可  
めてうちすき給ふにも心のみうこくにつゆはか

里奈礼止以止安八礼尔可多之計奈久於保衣帝  
りなれといとあはれにかたしけなくおほえて

【濔標】 57

宇知奈幾奴  
うちなきぬ

加寸奈良天奈尔者乃事毛可比奈起尔奈止  
かすならてなにはの事もかひなきになと

美越徒久之思曾女氣武多三乃志満尔見曾起  
みをつくし思そめけむたみの、しまにみそき

徒可宇末川留御波良部農毛乃尔徒希天多天末川  
つかうまつる御はらへものにつけてたてまつ

流日久礼可多耳奈利由久夕志本美知幾天入  
る日くれかたになりゆく夕しほみちきて入

江能多川毛己恵於之末奴本止乃安八礼奈留於利  
江のたつもこゑおしまぬほどのあはれなるおり

可良奈礼者尔也人女毛徒末寸安比三満本之欠  
からなればにや人めもつ、ますあひまほしく

佐部於保左類  
さへおほさる

露希左乃武可之尔、多流旅衣多三能、  
露けさのむかしに、たる旅衣たみの、

大正大学の翻刻『源氏物語』（明石・濔標）

【濔標】 58

志満乃奈尔者可久礼寿美知能末、仁可比安留世宇  
しまのなにはかくれすみちのま、にかひあるせう

衣宇安曾比乃、志利太未遍登御心尔八猶可、利天  
えうあそひの、しりたまへと御心には猶かゝりて

於本之屋留安曾比<sup>入</sup>止毛乃徒止比満以連留加武太  
おほしやるあそひ<sup>入</sup>ともものつとひまいれるかむた

知女止幾古由連止王可也可仁古止己能満之希奈留  
ちめときこゆれとわかやかにことこのましけなる

八美奈女止、女給部可女利左礼止以天也於可之起事  
はみなめと、め給へかめりされとてやおかしき事

裳毛乃、安八礼毛人可良己曾安部希礼奈能女奈留古  
ももの、あはれも人からこそあへけれなのめなるこ

止多仁春己之安王起可多仁与利奴留八心止、武留太  
とたにすこしあわきかたによりぬるは心と、むるた

与利毛奈起毛乃越止於保春尔遠乃可心越屋  
よりもなきものをとおほすにをのか心をや

里天与之女幾安部留毛宇止満之宇於保之希利  
りてよしめきあへるもうとましようおほしけり

【落標】 59

閑乃人八春久之幾古衣天又乃日曾与呂之可利  
かの人はすくしきこえて又の日そよろしかり

介礼者見天久良多天末川留本止丹徒希多流願  
ければみてくらたてまつるほとにつけたる願

止毛奈止可川く者多之計留又中く毛能思曾八利  
ともなとかつくはたしける又中くもの思そはり

天安氣久礼久知於之幾身越思日奈計具以満  
てあけくれくちおしき身を思ひなけくいま

也京尔於八之徒久良武止思不日可寸毛遍春御徒  
や京におはしつくらむと思ふ日かすもへす御つ

可比安利古能己呂農保止丹武可部無己止越曾乃  
かひありこのころのほとにむかへむことをその

太末部留以止太乃毛之氣仁可寸満部乃多末不  
たまへるいとたのもしけにかすまへのたまふ

女礼止以左也満多志満古起者那連奈可曾良丹心  
めれといさやまたしまきはなれなからに心

本曾幾己止也安良武止思日王川良婦入道毛左天  
ほそきことやあらむと思ひわつらふ入道もさて

【落標】 60

以多之者奈多无八以止字之呂女多字左利止天可  
いたしはなたんはいとうしろめたうさりとてか

久宇川毛礼春具左武遠思者武毛中く幾之  
くうつもれすくさむを思はむも中くきし

可多乃年比与利毛心徒久之奈利与呂徒耳  
かたの年比よりも心つくしなりよろつに

徒、満之字思多知可多起己止越幾己遊満己止也  
つ、ましよう思たちかたきことをきこゆまことや

可能左以宮毛閑八利給尔之可八美也春武所乃本  
かのさい宮もかはり給にしかはみやすむ所のほ

里給天後八可八良奴左満尔奈尔事毛止不良  
り給て後かはらぬさまになに事もとふら

比幾古盈給事八安利可多起末天奈左計遠徒  
ひきこえ給事はありかたきまでなさけをつ

久之給部止武可之多仁川連奈可利之御心者部農  
くし給へとむかしたにつれなかりし御心はへの

中く奈良無奈己利八見之止思者奈知給部連八  
中くならむなこりは見しと思はなち給へれば



【濔標】 61

和多利給奈止春流古止八己止丹奈之安奈可知仁宇  
わたり給などすることはにしあななちになう

古可之幾古衣給天毛王可心奈可良志利可多久止可久  
こかしきこえ給てもわか心なからしりかたくとかく

閑、徒良八武御安利幾奈止毛所世字於保之奈利  
か、つらはむ御ありきなども所せうおほしなり

尔多礼者志井多流左満尔毛於八世春左以宮遠曾  
にたれはしぬたるさまにもおはせずさい宮をそ

以可尔祢日奈利給奴良武止遊可之宇於毛比幾古  
いかにねひなり給ぬらむとゆかしうおもひきこ

盈給奈越可能六条乃婦留宮遠以止与久春利之  
え給なをか六条のふる宮をいとよくすりし

徒久呂比多利希礼者美也比可尔天春三給介利  
つくろひたりければみやひかにてすみ給けり

与之徒幾給部留己止希利可多久天与起女房奈  
よしつき給へることけりかたくてよき女房な

止於保久春以多留人能徒止比止己呂尔天毛能左  
とおほくすいたる人のつとひところにてもものさ

【濔標】 62

比之幾也宇奈礼止心也礼留左満尔天遍末末  
ひしきやうなれと心やれるさまにてへたまふ

保止仁尔八可耳於毛久王良比給日天物以止心保  
ほとにはかにおもくわらひ給ひて物いと心ほ

曾久於本左礼希礼者徒三布可起本止利丹年部  
そくおほされければつみふかきほとりに年へ

徒留毛以美之宇於保之天安末仁奈利給奴於  
つるもいみしうおほしてあまになり給ぬお

止、幾、給天可計く志幾春地尔八安良祢止猶左  
と、き、給てかけくしきすちにはあらねと猶さ

流可多乃毛能遠毛幾古盈安八世人尔思幾古盈  
るかたのものをもきこえあはせ人に思きこえ

徒留越閑久於保之奈利丹希流可久知於之宇  
つるをかくおほしなりにけるかくちおしう

於保衣給部八於止呂幾那可良和多利給部利安可寸  
おほえ給へはおとろきながらわたり給へりあかす

安八礼奈留御止不良比幾古衣給不知可起御満久  
あはれなる御とふらひきこえ給ふちかき御まく

【濡標】 63

良加三丹於末之与曾比天氣宇楚久丹遠之加、  
らかみにおまじよそひてけうそくにをしか、

里天御返奈止幾古衣給毛以多宇与波利給部留  
りて御返なときこえ給もいたうよりはり給へる

希八比奈礼者多衣奴心左之能本止八衣美衣多天  
けはひなれはたえぬ心さしのほとはえみえたて

末川良天也止久知於之字天以美之字奈以給可久  
まつらてやとくちおしうていみしうない給かく

満天毛於保之止、女多利計留遠女毛与呂徒尔  
までもおほしとゝめたりけるを女もよるつに

安八礼尔於保之天齋宮能御事遠曾幾古衣給  
あはれにおほして齋宮の御事をそきこえ給

心保曾久天止末利給八武遠可奈良寸古止仁布礼  
心ほそくてとまり給はむをかならずことにふれ

帝可寸末部幾古衣給部又美遊徒留人毛奈久多  
てかすまへきこえ給へ又みゆつる人もなくた

久比奈起御安利左満尔奈武可比奈起身那可良毛  
くひなき御ありさまになむかひなき身なからも

【濡標】 64

以満志者之世中遠思乃止武留本止八止左満閑宇  
いましはし世中を思のとむるほどとさまかう

左満毛乃越於保之志流末天美多天末川良武止  
さまものをおほしするまでみたてまつらむと

己曾思太末部川連止天毛幾盈以利徒、奈以給  
こそ思たまへつれとてもきえいりつゝない給

加、類御事奈久天多仁思者奈知幾古衣左寸部  
かゝる御事なくてたに思はなちきこえさすへ

幾尔毛安良奴越満之天心乃於与八武尔志多可比  
きにもあらぬをまして心のおよはむにしたかひ

天八奈耳己止毛宇之呂三幾古盈武止奈無思不  
てはなにこともうしろみきこえむとなむ思ふ

給不留左良仁宇之呂女太久那思日幾古衣給曾奈  
給ふるさらになうしろめたくな思ひきこえ給そな

止幾古衣給部者以止可多起事満己止尔宇知太  
ときこえ給はいとかたき事まことにうちた

乃武部幾於也奈止丹天美遊徒留人多仁女遠也  
のむへきおやなどにてみゆつる人たに女をや

【濔標】 65

尔八奈礼奴留八以止安八礼奈留己止仁己曾侍女礼満  
にはなれぬるはいとあはれなることにこそ侍れま

之天於毛本之入女可左武尔徒希天毛安知起奈  
しておもおし人めかさむにつけてもあちきな

幾可多也字知満之里入尔心毛遠可礼給八武宇多天  
きかたやうちましり人に心もをかれ給はむうたて

安累思日屋利古止奈礼止可希天左也宇能与徒  
ある思ひやりことなれとかけてさやうのよつ

以多留春知尔於保之与留奈宇起身遠徒三侍留尔毛  
いたるすちにおほしよるなうき身をつみ侍るにも

女八思日能本可丹天毛乃思遠曾不流毛乃尔奈武  
女は思ひのほかにてもの思をそふるものになむ

侍気礼者以可天左流可多越毛天者奈礼天美多天  
侍ければいかてさるかたをもてはなれてみたて

末川良武止思不給不流奈止幾古衣給部八安以奈久  
まつらむと思ふ給ふるなときこえ給へはあいなく

毛乃給可那止於保世止登之己尔与吕徒思不  
もの給かなとおほせとししころによつ思ふ

【濔標】 66

給遍志利尔多流毛乃越武可之乃春起心能  
給へしりにたるものをむかしのすき心の

奈古利安利可本仁乃多末比奈寸毛本以那久  
なこりありかほにのたまひなすもほいなく

奈武与之遠乃徒可良止天登八久良字奈利宇知  
なむよしをのつからとてはくらうなりうち

盤於保止乃安不良本乃可尔毛能与礼止本利天  
はおほとのおふらほのかにものよりとほりて

美遊留遠毛之毛也止於保之帝也遠良見幾丁  
みゆるをもしもやとおほしてやをらみき丁

乃本己吕比与利美多末部八心毛止奈起程能本  
のほころひよりみたまへは心もとなき程のほ

可希尔御久之以止於可之希仁者奈也可仁曾幾天  
かけに御くしいとおかしけにはなやかにそきて

与利井太末部留惠尔可起多良武左満之天  
よりあたまへる糸にかきたらむさまして

以美之宇安八礼奈利丁乃日武可之於毛天耳  
いみしうあはれなり丁のひむかしおもてに

【落標】 67

曾比婦之給部流曾宮奈良無可之美幾丁農  
そひふし給へるそ宮ならむかしみき丁の

志止許奈久比幾也良礼多留与利御女と、女天  
しとけなくひきやられたるより御めと、めて

見止越之給部連波徒良徒惠川幾天以止毛  
見とをし給へればつらつゑつきていとも

乃可那之止於保以多留左滿奈利者徒可奈礼  
のかなしとおほいたるさまなりはつかなれ

止以止宇徒久之氣奈良武止美遊御久之能可、  
といとうつくしけならむとみゆ御くしのか、

里多留本止可之良徒幾希八比安天尔計多  
りたるほとかしらつきけはひあてにけた

可起毛乃可良比知、加尔安以行徒幾給部留  
かきものからひち、かにあい行つき給へる

希八比志留久美衣給部八心毛止奈久由可之幾  
けはひしるくみえ給へは心もとなくゆかしき

尔毛左八可利能給不毛乃遠止於保之可部春以止  
にもさはかりの給ふものをおほしかへすいと

【落標】 68

久留之左滿佐利侍可多之希奈起遠者也和多良  
くるしさまさり侍かたしけなきをはやわたら

勢給祢止天人尔可起布世良礼給不知可久滿以利  
せ給ねとて人にかきふせられ給ふちかくまいり

多留志類之仁与呂之宇於保左礼八宇礼之可留部  
たるしるしによるしうおほされはうれしかるへ

幾遠心久類之幾和左可那以可尔於保左留、曾  
きを心くるしきわさかないかにおほさる、そ

止天乃曾幾給不氣之幾奈礼者以止於曾呂之  
とてのそき給ふけしきなればいとおそろし

氣尔侍也美多利心知能以止加久可幾利奈留  
けに侍やみたり心ちのいとかくかきりなる

於利之毛和多良勢給部留八滿己止尔安左可良須  
おりしもわたらせ給へるはまことにあさからす

奈武思侍己止越春古之毛幾古盈左世徒連八左  
なむ思侍ことをすこしもきこえさせつればさ

里止毛登太乃毛之具奈武止幾古部左世給  
りともとたのもしくなむときこえさせ給

【濔標】 69

可、流御由以古无乃川良丹於保之希留毛以止、安かゝる御ゆいこんのつらにおほしけるもいと、あ

八礼尔奈武古院乃美己多知安末多毛能之給はれになむこ院のみこちあまたものし給

部止志多之具武徒比於保春毛於左、奈幾越へとしたしくむつひおほすもおさゝなきを

宇遍乃於奈之美己多知能字知尔可春満部幾うへのおなしみこちのうちにかすまへき

古盈給之可者佐己曾八太乃三幾古盈侍良女こえ給しかはさこそはたのみきこえ侍らぬ

春古之於止奈之幾保止尔奈利奴留与八比すこしおとなしきほとになりぬるよはひ

奈可良安川可不毛奈希礼者佐宇、之幾越なからあつかふ人もなければさう、しきを

奈止幾古盈天可部利給奴御止不良比以満春己之なときこえてかへり給ぬ御とふらひいますこし

多知満左利天志者、幾古衣給不七八日安利天たちまさりては、きこえ給ふ七八日ありて

【濔標】 70

宇世給尔希利安部奈宇於保左留、丹与毛以止者うせ給にけりあへなうおほさるゝによもいと

可奈久天毛乃心本曾久於保左礼天宇知部毛満以かなくとも心ほそくおほされてうちへままい

里給八寸止可久乃御事奈止越幾天左世給ふ又たり給はずとかくの御事などをきてさせ給ふ又た

乃毛之幾人毛古止丹於八世左利希利布留幾のもしき人もことにおはせさりけりふるき

齋宮乃宮徒可左奈止徒可宇末川利奈礼多留齋宮の宮つかさなとつかうまつりなれたる

曾王川可耳事止毛佐多女希流御美川可良毛そわつかに事ともさためける御みつからも

和多利給部利宮尔御世宇曾己幾古盈給奈仁事わたり給へり宮に御せうそきこえ給なに事

毛於保衣侍良天奈武止女別当之天幾古盈もおほえ侍らてなむと女別当してきこえ

給部利幾古衣左勢乃給遠幾之事止毛者部之給へりきこえさせの給をきし事ともはへし

【潯標】 71

遠以滿八遍多天奈起左滿尔於保左礼者宇礼之具をいまはへたてなきさまにおほされはうれしく

奈武止幾古盈給天人く女之以天、安留部幾なむときこえ給て人くめしいて、あるへき

事止毛於保世太末不以止太乃毛之氣尔止之こともおほせたまふいとたのもしけにとし

己呂能御心者部止利可遍之徒遍宇美遊以止以ころの御心はへとりかへしつへうみゆいとい

可女之字止乃、人く加寸毛奈宇徒可宇末川良かめしうとの、人くかすもなうつかうまつら

勢給部利安八礼尔宇知奈可女徒、御左宇之丹天せ給へりあはれにうちなかめつ、御さうしにて

美春於呂之古女天於己奈八世給ふ宮尔八川祢尔みすおろしこめておこなはせ給ふ宮にはつねに

止不良比幾古盈給也字く御心志川末利給天盤とふらひきこえ給やうく御心しつまり給ては

身川可良御可部利奈止幾古盈給尔徒、滿之宇於みつから御かへりなときこえ給につ、ましようお

【潯標】 72

本之多礼止御女能止奈止可多之希奈之止曾、乃可ほしたれと御めのとなどかたしけなしとぞ、のか

之幾己由留奈利希利雪美曾礼可起美多礼安しきこゆるなりけり雪みそれかきみたれあ

類、日以可尔宮乃安利左滿可寸可尔奈可女給良无る、日いかに宮のありさまかすかになかめ給らん

止思屋利幾古盈給天御徒可比多天末川礼給と思やりきこえ給て御つかひたてまつれ給

遍利多、以滿乃空越以可尔御良无春良無へりた、いまの空をいかに御らんすらむ

布利美多礼比滿奈起空尔奈起人能安滿可ふりみたれひまなき空になき人のあまか

希留良武屋止曾可那之幾曾良以呂能可三乃久毛けるらむやとそかなしきそらいろのかみのくも

良八之幾尔可以給部利王可起人能御女尔止、末流らはしきにかい給へりわかき人の御めにと、まる

八可利止心之天徒久呂比給部留以止女毛安也奈利はかりと心してつくろひ給へるいとめもあやなり

【濔標】 73

宮八以止幾古盈仁久、志給部止己礼可連人徒天尔  
宮はいときこえにく、し給へとこれかれ人つてに

盤比武奈起己止、世女幾己由連ハル比以呂能可三  
はひむなきこと、せめきこゆればにひいろのかみ

以止加宇波之宇衣武奈留丹春見徒幾奈登満  
いとかうはしうえむなるにすみつきなとま

幾良八之天  
きははして

幾盈可天尔布流曾可那之幾可起久良  
きえかてにふるそかなしきかきくら

之我身曾礼止毛於毛保衣奴与仁徒、満之希  
し我身それともおもほえぬよにつ、ましけ

奈留可起左満以止於保止可丹御天春久礼天八安良祢  
なるかきさまいとおほとかに御てすくれてはあらね

止良宇多計尔安天者可奈留春知尔見由久多利  
とらうたけにあてはかなるすちに見ゆくたり

給之本止与利猶安可春於保之多利志越以満八  
給しほとより猶あかすおほしたりしをいまは

【濔標】 74

心尔可希天止毛可久毛幾古盈与利奴部幾曾可之  
心にかけてともかくもきこえよりぬへきそかし

止於保春仁八連以乃日起可部之以止於之久己曾  
とおほすにはれのひきかへしいとおしくこそ

古美也春武止己呂乃以止宇之呂女多計尔心越  
こみやすむところのいとうしろめたけに心を

起給之遠己止八利奈礼止世中の人毛左也宇仁  
き給しをことほりなれと世中の人もさやうに

思与利奴遍幾己止奈留越比幾太可部心幾与久  
思よりぬへきことなるをひきたかへ心きよく

天安川可比幾古衣武宇部乃以満春古之毛乃於保  
てあつかひきこえむうへのいますすしものおほ

之志留与八比尔奈良世給奈八内春見世左勢太  
ししるよはひにならせ給なは内すみさせせた

天末川利天左字く志幾尔可之徒幾久左仁己曾  
てまつりてさうくしきにかしつきさにごそ

登於保之奈留以止満女也可尔祢无己呂尔幾古衣  
とおほしなるとまめやかにねんころにきこえ

【濡標】 75

給天佐留部幾於利く八和多利奈止志多滿不可多  
給てさるへきおりくはわたりなとしましたまふかた

志希那久止毛武可之乃御奈古利於本之奈寸良  
しけなくともむかしの御なこりにおほしなすら

部天遣止遠可良須毛天奈左世給八、奈武本以奈留心知  
へてけとをからすもてなさせ給は、なむ本いなる心ち

春部幾奈止幾古盈給部止和利那久毛乃八知  
すへきなときこえ給へとわりなくものはち

遠之給不於久滿利多流人左滿尔天本乃可尔  
をし給ふおくりまりたる人さまにてほのかに

毛御己惠奈止幾可世多天末川良无八以止仁奈久女川  
も御こゑなときかてたてまつらんはいとになくめつ

良可奈留事止於保之多礼者人く毛幾古盈  
らかなる事とおほしたれば人くもきこえ

王川良比天可、流御心左滿遠字礼部幾古盈安部利  
わつらひてかゝる御心さまをうれへきこえあへり

女部多宇内侍奈止以不人く安留八者奈礼多天末川良  
女へたう内侍などいふ人くあるははなれたてまつら

【濡標】 76

奴王可武止遠利奈止尔天心八世安流人く於  
ぬわかむとをりなとにて心はせある人くお

保可類部之古乃人志礼春思不可多乃滿之良比  
ほかるへしこの人しれす思ふかたのましらひ

遠世左勢多天末川良无尔人尔於止利給不滿之可  
をせさせたてまつらん人におとり給ふましか

女利以可天左也可尔御可多知遠美天之可那止於思春  
めりいかてさやかに御かたちをみてしかなとおほす

毛宇知止久部幾御遠也心尔八安良春也安利希武  
もうちとくへき御をや心にはあらずやありけむ

王可御心毛左多女可多介礼者閑久思止以不事毛  
わか御心もさためかたければかく思といふ事も

人尔毛毛良之給八春御和左奈止乃御己止遠毛止利  
人にももらし給はず御わさなどの御己止をもとり

和幾天世左勢給部八安利可多起御心越宮人毛  
わきてせさせ給へはありかたき御心を宮人も

与呂己比安遍利波可那久春久流月日尔  
よろこひあへりはかなくする月日に



【濔標】 77

曾部天以止、左比之真心保曾起已止乃三滿左留尔  
そへていと、さひしく心ほそきことのみまさるに

左婦良不人くも毛也宇く安可礼由幾奈止之帝  
さふらふ人くもやうくあかれゆきなどとして

志毛徒可多乃京極和多利奈礼者人希止越久  
しもつかたの京極わたりなれば人けとをく

山寺乃入安比能己恵く、尔曾部天毛祢奈起可知  
山寺の人あひのこゑく、にそへてもねなきかち

尔天曾春久之給不於奈之幾御遠也止幾古  
にてそすくし給ふおなしき御をやときこ

盈之奈可尔毛可多時乃末毛多知者奈礼多天  
えしなかにもかた時のまもたちばなれたて

末川利給八天奈良八之多末末川利給比天齋宮  
まつり給はてならはしたてまつり給ひて齋宮

尔毛遠也曾比天久多利給事八連以奈起事奈留  
にもをやそひてくたり給事はれいなき事なる

遠安奈可知尔以左奈比幾古盈給比之御心  
をあなかちにいさなひきこえ給ひし御心

【濔標】 78

尔可起利安流美知丹天八多久比幾古盈給八  
にかきりあるみちにてはたくひきこえ給は

寸奈利尔之遠比留与那宇於本之奈計幾多利  
すなりにしをひるよなうおほしなけきたり

佐不良婦人く太可き毛以也之幾毛安末多  
さふらふ人くたかきもいやしきもあまた

阿利左礼止於止、能御女乃止多知多仁心丹満可世  
ありされとおと、の御めのとたちたに心にまかせ

多留事比幾以多之徒可宇末川留奈止、遠也加利  
たる事ひきいたしつかうまつるなど、をやかり

申給部八以止者川可之幾御安利左満尔比无奈起  
申給へはいとはつかしき御ありさまにひんなき

古止幾古之女之徒希良礼志止比此恵津、者  
こときこしめしつけられしといひ思つ、は

可奈起事能奈左計毛左良丹徒久良須院尔毛可  
かなき事のなさけもさらにつくらす院にもか

乃久多利給之大極殿乃以徒閑之可利志幾之起  
のくたり給し大極殿のいつかしかりしき

【落標】 79

尔由、之幾末天美衣給之御可多知遠王春礼  
にゆ、しきまでみえ給し御かたちをわすれ

可多宇於本之遠起希礼八満以利給天齋院奈止  
かたうおほしをきければまいり給て齋院など

御波良可良能宮、於八之末寸多久比尔天左婦良  
御はらからの宮、おほしますたくひにてさふら

比給部止美也春所尔毛幾古盈給幾左礼止也武  
ひ給へとみやす所にもきこえ給きされとやむ

古止奈起人、左不良比給尔可春、奈留御宇之呂  
ことなき人、さふらひ給にかす、なる御うしろ

三毛奈久天也止於保之徒、三字遍八以止安川志宇  
みもなくてやとおほしつ、みうへはいとあつしう

於八之満春毛於曾呂之字又毛乃思日也久八部給  
おはしますもおそろしう又もの思ひやくはへ給

者武止八、閑里春久之給之遠以満八末之天多  
はむとは、かりすくし給しをいまはましてた

礼可八徒可宇末川良无止人、思比多留遠祢无  
れかはつかうまつらんと人、思ひたるをねん

【落標】 80

己呂尔院尔八於本之乃給八世氣利於止、幾、給  
ころに院にはおほしの給はせけりおと、き、給

天院与利御氣之幾安良武遠比幾太可部与己止利  
て院より御けしきあらむをひきたかへよことり

給八武遠可多之希奈起事止於保春仁人能御安利  
給はむをかたしけなき事とおほすに人の御あり

左満乃以止良宇太氣耳見者那多无八又久知於  
さまのいとらうたけに見はなたんは又くちお

之宇天入道乃宮尔曾幾古盈給希流加宇、  
しうて入道の宮にそきこえ給けるかう、

農己止越奈武思不給部王川良婦丹者、美也春武  
のことをなむ思ふ給へわつらふには、みやすむ

所以止於毛、志久心布可起左満尔毛能之侍之  
所いとおも、しく心ふかきさまにものし侍し

遠安知幾奈起春幾心尔満可世天左留満之  
をあちきなきすき心にまかせてさるまし

幾那遠毛奈可之宇起毛乃尔思遠可礼侍尔之遠  
きなをもなかしうきものに思をかれ侍にしを

【濔標】 81

奈武与仁以止於之具思太末不留古乃世尔天曾能  
なむよにいとおしく思たまふるこの世にてその

宇良見乃心止計須春起侍尔之遠以満八止奈利  
うらみの心とけすすき侍にしをいまはとなり

天乃幾八尔古乃左以宮能御事越奈武毛能世  
てのきはにこのさい宮の御事をなむものせ

良礼之可者左毛幾、遠起心尔毛乃己寸満之宇古  
られしかはさもきゝをき心にもこのすましうこ

曾八左寸可耳見遠起給計女止思比給不流尔  
そはさすかに見をき給けめと思ひ給ふるに

毛志乃比可多宇於保可多乃与仁徒希天多仁  
もしのひかたうおほかたのよにつけてたに

心久類之幾事八見幾、寸久左礼奴王左仁侍  
心くるしき事は見きゝすくされぬわざに侍

遠以可天奈起可計尔天毛可能宇良見和春留者可利  
をいかてなきかけにてもかのうらみわするはかり

止思日給不留遠宇知尔毛佐己曾遠止奈比左世給  
と思ひ給ふるをうちにもさこそをとなひさせ給

【濔標】 82

部止以登幾奈起御与八井丹於八之満春越寸  
へといときなき御よはぬにおはしますす

古之毛乃、心志類人八左婦良八礼天毛与久也  
こしものゝ心しる人はさふらはれてもよくや

止思太末不留越御佐多女丹奈止幾古衣給部八以  
と思たまふるを御さためになときこえ給へはい

登与宇於保之与利希留越院尔毛於保左武事  
とようおほしよりけるを院にもおほさむ事

盤希仁可多之計奈宇以止於之可類部介礼止可乃  
はけにかたしけなういとほしかるへけれとかの

御由以古武遠可己知天志良春可本丹末以良世太  
御ゆいこむをかこちてしらすかほにまいらせた

天末川利給部可之以満者多左也宇能事 and 左止毛  
てまつり給へかしいまはたさやうの事わざとも

於本之止、女寸御於己奈比可知尔奈利給天可  
おほしとゝめす御おこなひかちになり給てか

宇幾古盈給遠婦可宇志毛於本之止女女之止思  
うきこえ給をふかうしもおほしとめめしと思

【濡標】 83

太末不留佐良八御氣之幾安利天可寸末部  
たまふるさらは御けしきありてかすまへ

左世給八、毛与遠之者可利農己止越曾不  
させ給は、もよをしはかりのことをそふ

流尔奈之侍良武止左満可宇佐満尔思給部乃  
るになし侍らむとさまかうさまに思給への

己寸事奈幾仁閑久末天左波可利乃心可末  
こす事なきにかくまでさはかりの心かま

部毛末称比侍尔与人也以可尔止己曾八、加利  
へもまねひ侍によ人やいかにとこそは、かり

侍連奈止幾古盈太末天乃知尔八氣耳志  
侍れなときこえたまでのちにはけにし

良奴也尔天古、丹和多之多天末川利天武  
らぬやうにてこゝにわたしたてまつりてむ

止於保春女君尔毛志可奈武思可多良比幾古衣天  
とおほす女君にもしかなむ思かたらひきこえて

春久以給八武尔以止与起本止奈留安八比奈良无  
すくい給はむにいとよきほとなるあはひならん

【濡標】 84

止幾古衣志良勢給部者字礼之幾己止仁於保之  
ときこえしらせ給へはうれしきことにおほし

天御和多利乃己止越以曾起給不入道農美也兵  
て御わたりのことをいそぎ給ふ入道のみや兵

部卿乃宮農比女君遠以徒之可登可之徒幾左八幾  
部卿の宮のひめ君をいつしかとかしつきさはき

給不女留遠於止、乃比満安流御中尔天以可、毛天  
給ふめるをおとゝのひまある御中にていか、もて

奈之給八武止心久留之具於保春権中納言能  
なし給はむと心くるしくおほす権中納言の

御武春女八己起殿農女御止幾古遊於保止乃、御  
御むすめはこき殿の女御ときこゆおほと、御

己丹天以止与曾保之宇毛天可之徒幾給不宇遍  
こにていとよそほしうもてかしつき給ふうへ

毛与起御安曾比可太幾尔於保以多利宮乃中  
もよき御あそひかたきにおほいたり宮の中

乃君毛於奈之保止仁於八寸連八宇多天比乃  
の君もおなしほどにおはすれはうたてひぬ

【濔標】 85

奈安曾比能心知春部幾遠於止奈之幾御宇之  
なあそひの心ちすへきをおとなしき御うし

路三八以止宇礼之可類部幾己止、於本之乃多末比  
ろみはいとうれしかるへきこと、おほしのたまひ

帝左留御氣之幾、古衣給徒、於止、能与呂徒尔  
てさる御けしき、こえ給つ、おと、のよろつに

於本之以多良奴古止那久於保也希可多能御宇之  
おほしいたらぬことなくおほやけかたの御うし

呂三八佐良尔毛以八寸阿希久礼尔徒希天己滿  
ろみはさらにもいはすあけくれにつけてこま

可奈留御心者部乃以止安八礼丹美衣給不遠太乃毛  
かなる御心はへのいとあはれにみえ給ふをたのも

志幾毛乃尔思幾古盈給天以止安徒志久能三  
しきものに思きこえ給ていとあつしくのみ

於八之末勢者末以利奈止之給天毛心也寸久  
おはしませはまいりなとし給ても心やすく

左婦良比太末不事毛可多起遠春古之於止奈比  
さふらひたまふ事もかたきをすこしおとなひ

【濔標】 86

天曾比佐不良八武御宇之路三八可奈良須安留部幾  
てそひさふらはむ御うしろみはかならずあるへき

己止奈利氣利  
ことなりけり